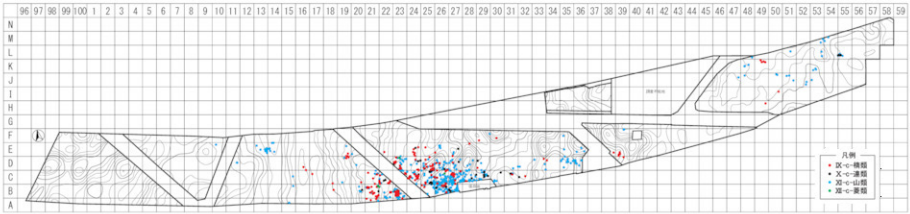
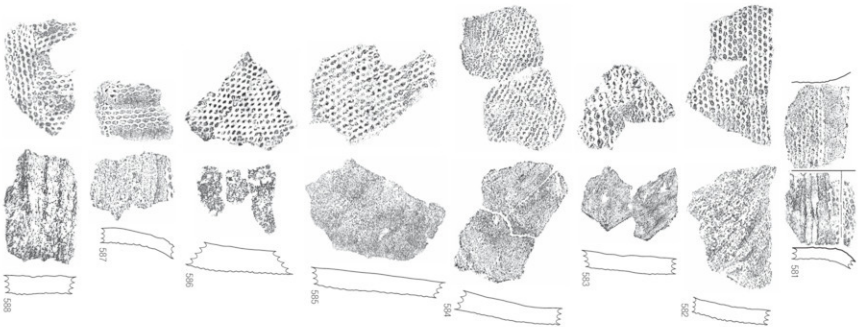


第324図　遺物分布図（Ⅸ-c-精類・Ⅸ-c-連類・Ⅸ-c-山類・Ⅸ-c-菱類）



第325図　Ⅸ-c-精類（1）

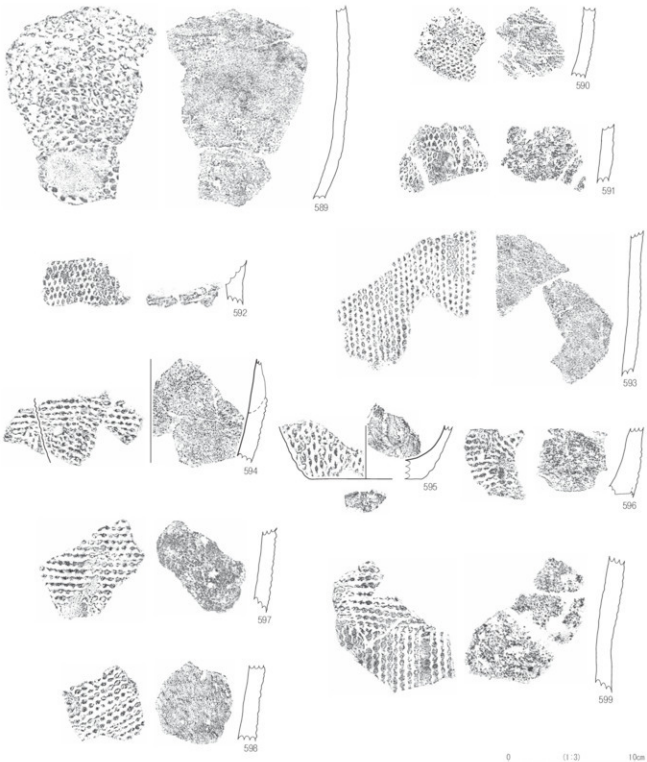
外面に楕円押型文を横位に施すが，一部は斜位の楕円押型文を施す。

595は外面に楕円押型文を縦位に施す胴部から底部である。底部は平底で，底部外面端部まで楕円押型文を施す。

Ⅸ－ｃ－連類（第326図597～599）

外面に連珠押型文を施す一群である。

597は外面に横位に，598は外面に斜位の連珠押型文を施す。599は外面上位に横位，下位に縦位の連珠押型文を施す。施文順は，横位→縦位である。



第326図　Ⅸ-c-楕類（2）・Ⅸ-c-連類

Ⅸ－ｃ－山類（第327図600～第329図629・632）

外面に山形押型文を施す一群である。

600～610は，外面に山形文を横位に施す。

611・612は，外面に１方向のみ山形押型文を斜位に施す。613は外面に２方向に山形押型文を斜位に施す。614は口縁部近くで，外面上位に２方向の斜位の山形押型文を，下位に横位の山形押型文を施す。その３つの施文間は無文部となる。施文順は，横位→縦位である。内面上位に外面と同一の山形押型文を横位に施す。615・616は，外面に山形押型文を斜位と横位に施す。617は外面上位に縦位の山形押型文を施し，下位に横位の山形押型文を施す。施文順は，横位→縦位である。618は外面上位に横位の山形押型文を施し，下位に斜位の山形押型文を施す。619～621は，外面に山形押型文を縦位に施す。

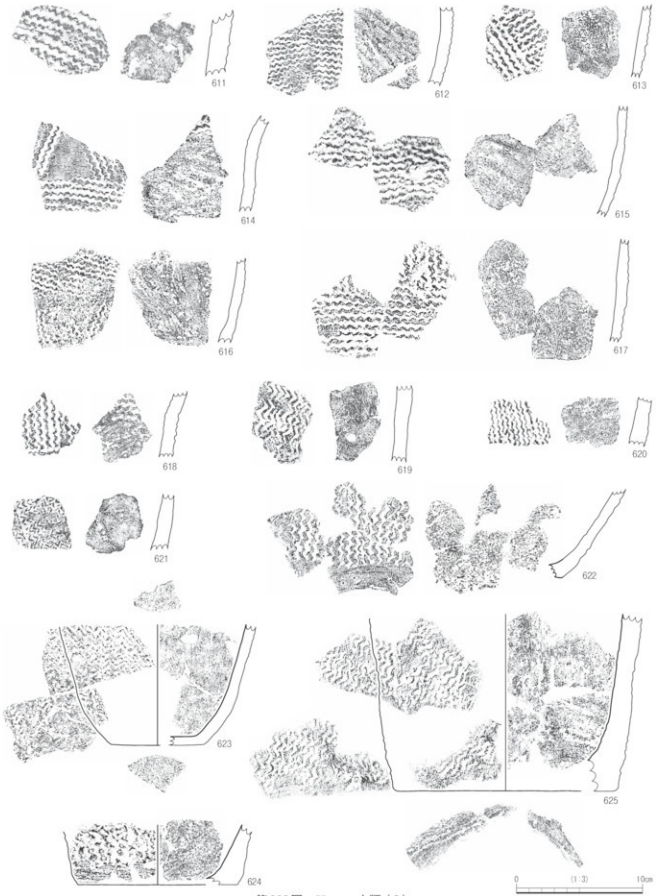
622・624・626～628・632は，胴部から底部で，外面に山形押型文を縦位に施す。624は底部の器壁が薄い。622・627・628は，胴部が大きく膨らみをもつと考えられる。622・627は，胴部下部には文様をもたず，ナデをおこなう。628は胴部下部まで山形文押型文を縦位に施す。

623は胴部から底部で，外面に山形押型文を横位に施す。内面はていねいに磨かれ黒色で光沢を帯びる。

625は胴部から底部で，外面に山形押型文をやや斜位に施す。底部は平底である。器壁は厚く，胴部は直立気味である。外面は剥落が著しい。

626は，外面の一部にタールが付着し，内面のには黒斑をおこなう。632は内面の一部にススが付着する。629は胴部で，632と同一個体と考えられる。626・632は，胴部が直立気味である。いずれも胴部下部に文様をもたない。

第327図　Ⅸ－ｃ－山類（１）


611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
0
(1:3)
10cm

第328図　Ⅸ－c－山類（2）

Ⅸ－ｃ－菱類（第329図630・631）

外面に菱形押型文を施す一群である。

630は外面にネガティブな菱形押型文を施す。ネガティブな施文方法は，630のみに確認された。

631は胴部から底部で，外面に菱形押型文を斜位に施す。胴部のみに施文され，底部外面端部との間に条痕をもつ。

Ⅹ類土器（第330図633～644）

器面に文様を施す箇所や器形がⅨ類に類似し，器面に撚糸文を施す一群である。

口縁部について

以下のような基準で細分した。

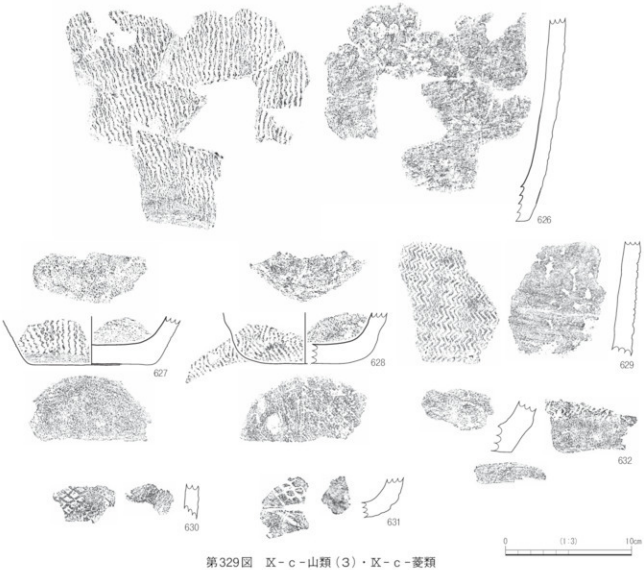
口縁部内面に明確な稜をもたないかもつか

a：明確な稜をもたないもの

b：明確な稜をもつもの

Ⅹ－ａ類（第330図633・634・636）

口縁部内面に明確な稜をもたず，口縁部外面に撚糸文を施す一群である。633・636は，口縁部外面に撚糸文を縦位に施す。口唇部や口縁部内面に文様をもたない。633は，波状口縁である。633・636は，同一個体と考えられる。634は，口縁部外面に撚糸文を縦位に施し，口縁部内面上部に外面と同一の撚糸文を横位に施す。口縁部に回転穿孔をもつ。穿孔の形状は，外面から見ると円形状で，器壁の中央まで施す。内面から見ると，2/3が円形状に器壁の中央まで施され，1/3は穿孔の痕跡がほとんどない。内面からの穿孔中に割れた可能性もある。



第329図　Ⅸ－ｃ－山類（３）・Ⅸ－ｃ－菱類

X－b類（第330図635・637～640・642）

口縁部内面に明確な稜をもち，口縁部外面に撚糸文を施す一群である。

635は，口縁部外面に撚糸文を横位に施す。口縁部内面に，外面と同一の撚糸文を横位に施した後，その上位に刺突文を施す。内面は工具による調整をおこない，やや光沢を帯びる。637・638は，635と同一の撚糸文を横位に施し，635と同一個体と考えられる。638は，底部に近い胴部である。

639・640は，口縁部外面に撚糸文を縦位に施す。639は口唇部に刺突文を施す。640は口縁部内面上部に外面と同一の撚糸文を横位に施した後，上位に刺突文を施す。波状口縁である。内面は工具による調整をおこない，やや光沢を帯びる。

642は口縁部外面に無文部を設け，その下位に撚糸のような文様を施すことから，この類とした。施文方向は不明である。口唇部や口縁部内面にも，外面と同一の文様を施す。

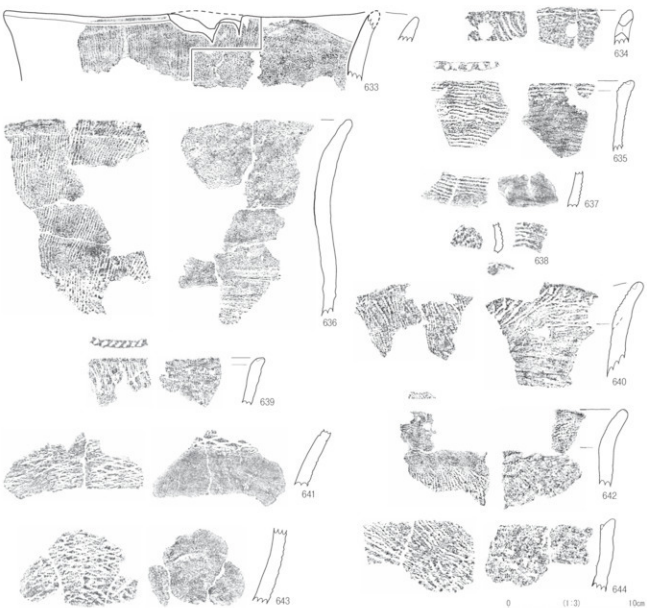
胴部・底部について

X類の中で口縁部と接合しない，もしくは同一個体と判断できない胴部・底部は，X－cと分類した。

X－c類（第330図641・643・644）

641・643は，外面に網目撚糸文を横位に施す。641は，口縁部近くの胴部で，内面上位に外面と同一の網目撚糸文を横位に施す。641・643は，同一個体と考えられる。

644は外面に撚糸文を施す。上積痕が確認できる。



第330図　X－a類・X－b類・X－c類

XI 類土器（第331図645・646）

器形に加え，文様を施す箇所がⅨ類に類似し，器面に縄文を施す一群である。

645は完形に近い個体となった。底部はていねいなナデをおこないやや光沢を帯びる。底部外面には指頭圧痕がみられ，そのためか，やや上げ底状となる。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部はやや外傾する。口縁外面上部から胴部下部までＬＲの単節斜縄文を横位に施す。縄文原体の長さは５～７㎝で，上部から下部の順に施す。口唇部は尖頭状で，口縁部内面は内傾し，明確な稜をもつ。内傾する部分のみ，外面同様の文様を横位に施す。稜より下位は，工具によるていねいなナデでやや光沢を帯びる。

646は外反する口縁部で，口縁部外面上部に無文部を設け，その下位に縄文を施す。口唇部や口縁部内面上部にも外面と同一の縄文を横位に施す。口縁部内面には明確な稜をもつ。

XII 類土器（第331図647）

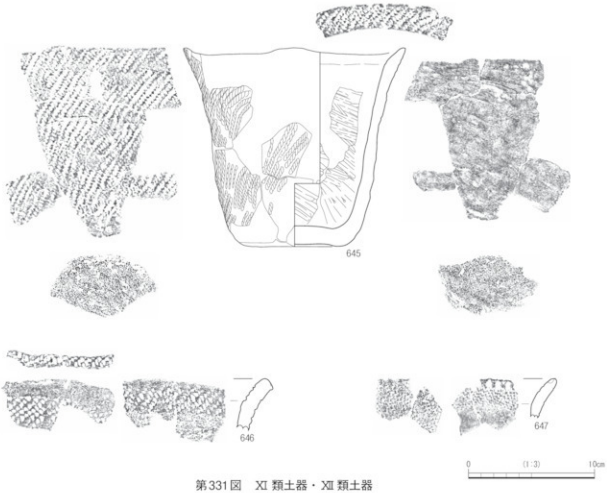
器形に加え，文様を施す箇所がⅨ類に類似し，器面に枝回転による文様を施す一群である。

647は外反する口縁部で，口縁部外面に枝回転を縦位に施す。口縁部内面には，外面と同一の枝回転を横位に施した後，その上位に刺突文を施す。口縁部内面は，明確な稜をもち，稜以下は工具による調整をおこなう。

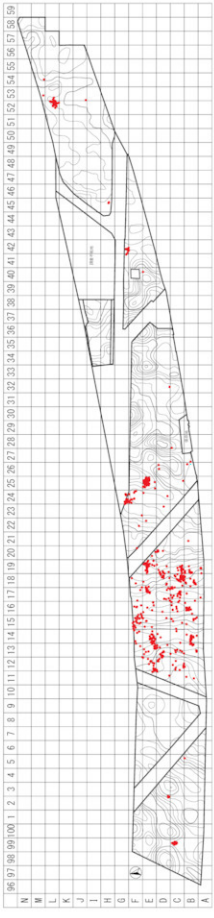
XIII 類土器（第333図648～第336図705）

器形は，底部から胴部にかけて膨らみ，胴上部で「く」の字状に屈曲し，頸部ですぼまり，口縁部で大きく外反する。口唇部はていねいに面取りし，平坦面を有する一群である。器壁は，厚さ４～６㎜程度の薄いものと厚さ９～11㎜程度の厚いものがある。

648～658・660・662は，押型文を施す一群である。648は，口縁部である。口唇部から口縁部外面に押型文を斜位に施す。652・653は，口縁部から胴部である。外面は山形押型文を縦位に施す。649・650は，口縁部である。外面は菱形押型文を施す。651は口縁部から胴部である。口唇部と口縁部外面は，菱形押型文を施す。654・656・658は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。654は口唇部と口縁部外面，胴部外面に菱形押型文を施す。658は胴部で，外面に菱形押型文を施す。



第331図　XI 類土器・XII 類土器



第332図　遺物分布図（XⅢ類土器）

655・657は，壺形土器の胴部と考えられる。外面は同心円押型文を施す。器壁が厚く，胎土に砂粒を多く含む。655・657は，同一個体と考えられる。660・662は，同一個体と考えられる。底面は浅い上げ底となる。山形押型文を口縁部から胴部上半外面は縦位に，胴部下半外面は斜位に施す。

659・661・663～666は，撚糸文を施す一群である。659・661・663は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。外面にやや大ぶりな２条１単位の撚糸文を網目状に施す。665は，外面は変形撚糸文を施す胴部である。664・666は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。外面は撚糸文を網目状に施す。口縁部内面は横位にケズリ調整をおこなう。

667～670・672・674・675は，沈線文を施す一群である。667・669は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。667は外面は大きめの山形押型文を施した後，口縁部と屈曲部を横位の沈線文で区画し，内部に紡錘状をモチーフとした沈線文で充填している。口縁部内面は，大きめの山形押型文を施す。内面には，指おさえが明瞭に見られる。668・670は，同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。668の口唇部は，工具による半裁竹管状の刺突文を施し，波状口縁である。口縁部外面は，曲線状のモチーフの沈線文で区画した後，縦位の沈線文を横状に施す。670は，668と同様に曲線状のモチーフの沈線文を数条施した後，下位に横位の沈線文を施す。672は口縁部で，口唇部に刺突文を施す。外面に横位の沈線文を施した後，その上から斜位の沈線文を施す。674・675は，口縁部及び胴部で同一個体と考えられる。674の口唇部は刺突文を施す。口縁部外面に横位・斜位の深い沈線文を施す。675は，屈曲部付近に突帯を貼り付け，突帯上に原体押圧と考えられる刺突文を施す。

671と673，676と677は，それぞれ同一個体と考えられる口縁部及び胴部である。外面に菱形押型文を施した後，横位の数条の沈線で区画し，区画内を２条１単位の波状の沈線文で充填する。口縁部内面に横位の沈線文を施す。

678・679は，外面に条線文を施す口縁部である。678は，斜位や曲線状の条線文を施し，679は，浅い条線文を斜位に施す。口縁部の形態的特徴や内面調整が他のXⅢ類土器と近似することから本類とした。

680は口縁部である。内外面ともナデをおこなうが無文である。

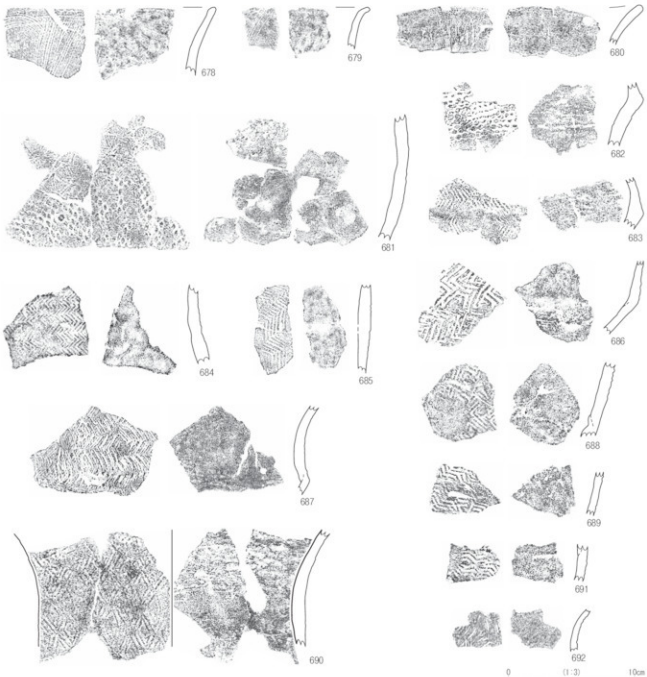
681は胴部である。外面上位に撚糸文を網目状に，下位に連珠押型文を施す。682は，屈曲する胴部である。外面に連珠押型文を施す。下部は無文である。683～688は，胴部である。外面に山形押型文を縦位に施す。683は外面に山形押型文を縦位に施すが，屈曲部付近はナデをおこない無文となる。684は，内面に指おさえが

第333図　XⅢ類土器（1）

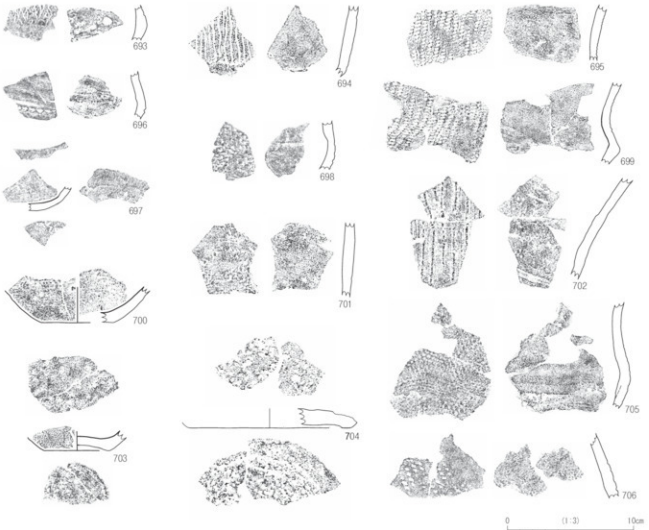
第334図　XIII類土器（2）

明瞭に見られる。686は，屈曲部付近と考えられる胴部であるが，683と異なり屈曲部の上でも連続して山形押型文を縦位に施す。687は，内面に屈曲上部を接合する際の，内傾接合の痕跡が明瞭に確認できる。689～691は胴部である。689は外面に山形押型文を斜位に施す。690は外面に菱形押型文を施す。691は外面に山形押型文を横位に施す。内面に屈曲上部の接合をする際の内傾接合の痕跡が明瞭に見られる。692～694は，胴部である。外面に撚糸文を施す。693は，屈曲上部付近に撚糸文を網目状に施す。694は，内面に指おさえが明瞭に見られる。695・699は，同一個体と考えられる胴部である。外面は屈曲部上部にＲＬの単節縄文を縦位に施す。696は外面に刺突文を施す。702は外面に微隆線によるミミズ腫れ文を縦位に施し，微隆線の両面を幅狭のヘラ状工具でていねいにナデをおこなう。698・701・705は胴部である。外面に枝回転による施文をもつ。698・701は，同一個体と考えられる。705は内面に指おさえをおこなう。

697・700・703・704は，底部で内外面とも無文である。703・704は底面が上げ底になる。



第335図　Ⅻ類土器（3）



第336図　XⅢ類土器（4）・XⅣ類土器

XⅣ類土器（第336図706）

XⅠ類とは異なる器形で，器面に縄文を一部に施す一群である。

706は胴部である。外面は斜位の短い縄文を施す。内面はナデをおこなう。

XⅤ類土器（第338図707～716）

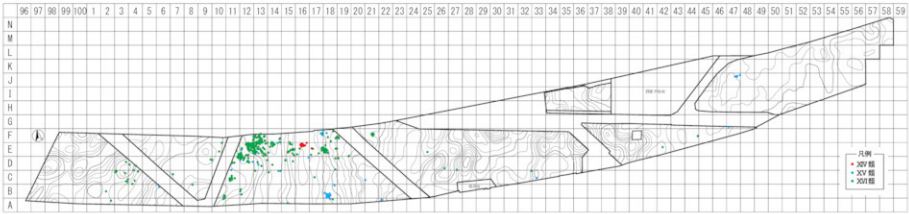
全て深鉢の口縁から底部で，全体の器形を窺える資料はない。口縁部は大きく外反し肥厚する。胴部は丸みを帯びる。口唇部にはキザミ，微隆帯＋キザミや沈線文と刺突文を文様にもつ一群である。

707～709は口縁部である。707は，口唇部外面に断面三角状の突帯が巡る。突帯の上下端にはキザミ，外面には3～4条の横位の沈線文，一部に縦位沈線文を施す。708は口縁部上部～中央部まで広く肥厚する。口縁部の上端に1列，下部に2列の連点文を横位に施す。この連点文の間に数条1組の鋸歯状沈線文および連点文を施す。胎土に金雲母を多く含む。709は口唇部内面の内傾する範囲にキザミを，口縁部外面上部には縦位の短い沈線文を施す。下部にはキザミを施す微隆帯をつくり出し，これを挟むように数条の横位の沈線文を施す。710は，口縁部近くで横位の沈線文を等間隔に数条施し，この間にキザミを施し微隆帯とする。壺の頸部の可能性もある。

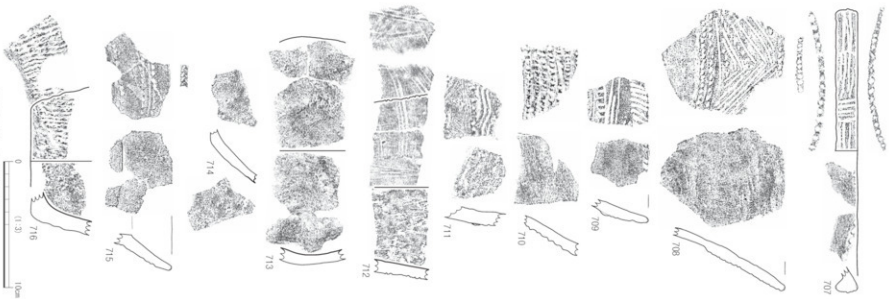
711～714は胴部である。711は外面上位にゆるやかな波状の沈線文を3条施し，下位にはキザミを施す微隆帯をつくり出す。712は，斜位や縦位の条線が見られるが，文様か調整痕か判断し難い。713はやや膨らみ，外面は無文である。714は，やや膨らみをもつ底部に近い胴部で，外面は無文である。

715・716は，XⅥ類の可能性もあるため，本類の最後に報告する。715は口縁部で，内面下位に稜をもつ。口唇部にキザミを施し，口縁部外面に連点文と沈線文を横位に施す。内外面に顔料付着と考えられる赤彩が認められる。

716は胴部から底部で，平底である。胴部外面全体に撚糸文を縦位に施す。胎土に白色鉱物を多く含む。



第337図　遺物分布図（XIV・XV・XVI類土器）



第338図　XV類土器

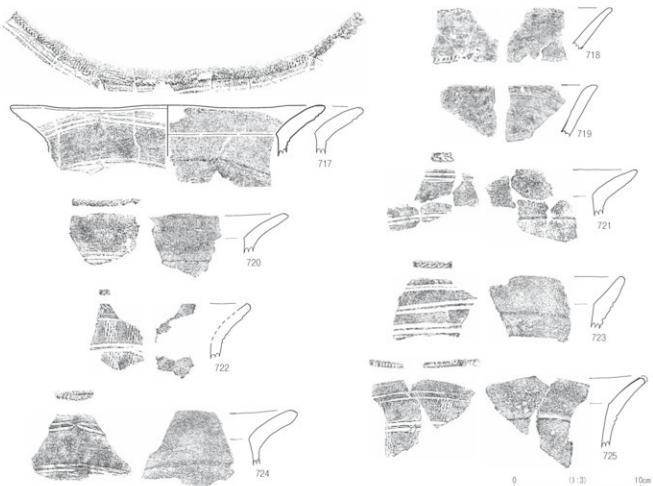
XVI類土器（第339図717～第344図763）

全て口縁部から底部までの破片資料で，全体の器形を窺える資料はない。口縁部は大きく外反し，頸部から胴部は屈曲する。沈線文や網目撚糸文，刺突文，連点文を組み合わせて文様を構成する一群である。

717～734は，沈線文と撚糸文の組み合わせで文様を構成する一群である。沈線文と網目撚糸文が切り合う，もしくは沈線文の区画内に撚糸文を充填するもので，縦位の網目撚糸文を施した後，横位の沈線文を施すものが多く見られる。

718・719は口縁部で，外反する器形である。718は薄手に成形した口縁部外面と，口縁部外面下位の横位の隆線上にキザミを施す。719は波状口縁で，内面はていねいなナデをおこなう。口縁部外面に文様をもたない。

717～723・725の口縁部は大きく外反し，胴部との境に強い屈曲をもつ。口唇部にキザミを施し，口唇部と平行するように2～3条1組の沈線文を，口縁部外面上部や屈曲部外面に施す。717・720～723の口縁部は平坦で，724・725の口縁部は波状である。717の口唇部には羽状のキザミと，ヘラ状工具による直線的なキザミを施すが，わずかに突出する頂部2ヶ所のみ短沈線文を横位に施す。口縁部外面の沈線文は，頂部の下で線を湾曲させ区切りとする。720は内外面にていねいなナデをおこなう。口唇部には羽状のキザミを施し，屈曲部外面に3条1組の短沈線文を施す。721は口唇部に羽状のキザミを施す。722は口唇部に羽状のキザミを施す。口縁部外面から胴部外面にかけ網目撚糸文を縦位に施した後，口縁部外面上部と屈曲部外面に2条1組の沈線文を横位に施す。723は屈曲部がやや肥厚し，口唇部には斜位のキザミを施し，口縁部外面は沈線文を等間隔に施す。724は口唇部の頂部に短沈線文を横位に施す。口縁部外面上部と屈曲部外面は，2条1組で沈線文を施し，上部の短沈線文は頂部の下で線を湾曲させ区切りとする。胴部は網目撚糸文を縦位に施す。725は口唇部にヘラ状工具によるキザミを施すが，波頂部には短沈線文を施す。口縁部外面から胴部外面に網目撚糸文を間隔をあけ縦位に施した後，口縁部外面上部と屈曲部外面に沈線文を横位に施す。両沈線文とも頂部の下で端部を弧状に施文する。



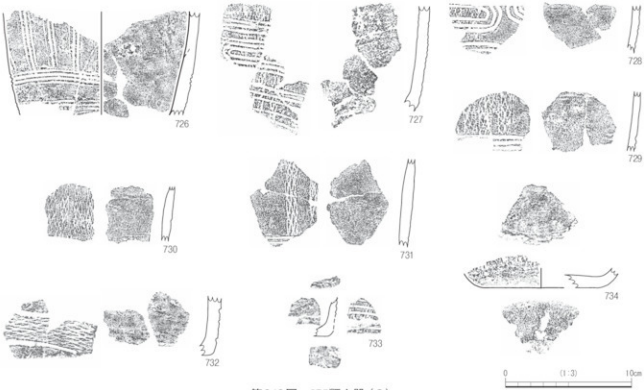
第339図　XVI類土器（1）

726 ～ 731は胴部で，わずかに上方に開き直線的もしくは内湾する。726は外面に４条１組の沈線文を横位に施した後，３条１組の沈線文を等間隔で縦位に施す。胎土に金雲母を多く含む。727は外面に網目撚糸文を等間隔で縦位に施した後，３条１組の沈線文を横位に施す。上から２組目と３組目の沈線文の間で，隣接する上下の２本の短沈線文端部を湾曲させ結合する。728の外面はていねいなナデをおこなう。外面に網目撚糸文を縦位に施した後，端部を湾曲させ折り返すように３条１組の沈線文を横位に施す。729・731は，網目撚糸文を縦位に施した後，729は３条，731は２条の沈線文を横位に施す。730の内外面はていねいなナデをおこなう。外面に網目撚糸文を間隔をあけ縦位に施す。

732 ～ 734は胴部から底部である。732の内外面ではていねいなナデをおこなう。胴部外面に２条の沈線文を横位に施し，その区画内で撚糸文を横位に施し充填する。733は胴部がわずかにすぼまりながら平担な底部へ至る。胴部外面に網目撚糸文を縦位に施した後，横位に沈線文を施す。727と同一個体と考えられる。734は胴部から丸みを帯びつつ平担な底部へ至る。内面には成形時の接合痕をおこなう。胴部外面は網目撚糸文を底部外面端部まで縦位に施す。

735 ～ 763は，直線や曲線の沈線文と貝殻条痕文を横位や斜位に施し，それらに平行するように貝殻刺突文を連続させ文様を構成する一群である。

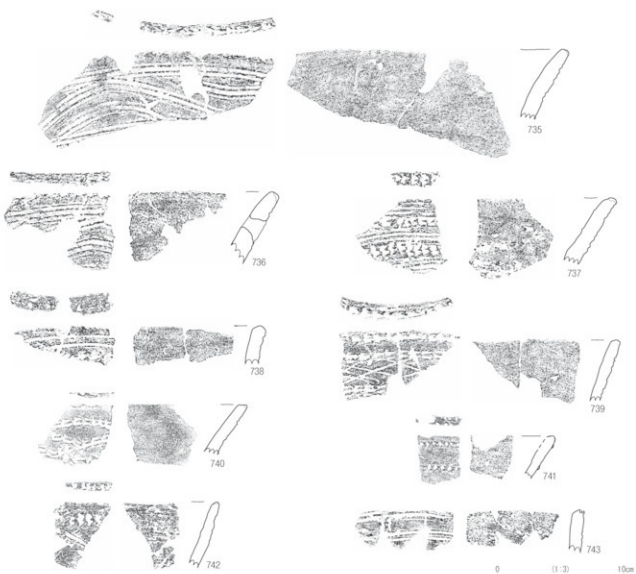
735 ～ 743・745は口縁部である。いずれも外反する。735 ～ 740は口唇部に貝殻腹縁による押引き状の刺突文を施す。口縁部外面を横位貝殻条痕文で区画した後，区画内をゆるやかな曲線で充填する。736は口縁部外面に貝殻条痕文を横位に直線および曲線で施す。737は口縁部外面に幅狭の横位貝殻条痕文を等間隔に施した後，縦方向に横位貝殻刺突文を施す。胎土に混入物が多く，白色鉱物，赤色鉱物が目立つ。738は外反がやや緩やかで，口唇部を丸く整形する。口縁部外面は上部に２条の横位の沈線文を施した後，縦向きに横位貝殻刺突文を連続して施す。口縁部外面は幅狭の横位貝殻刺突文を連続して施し区画とする。その区画内に斜格子状の沈線文を施す。下端部には横位の沈線文を施す。735・736・738は，胎土に金雲母を多く含む。740は口唇部を内傾気味の平担部として整形する。口縁部外面は貝殻腹縁による幅狭の横位貝殻刺突文を施し区画する。その区画内に同様の貝殻刺突文を波状に施す。741・743の口唇部は，内外端に稜をもち，口唇部に細かいキザミを施す。口縁部外面には細い微隆線を横位に２本つくり出した後，微隆線上で棒状工具によるキザミを施す。743の口唇部外面はやや磨滅，欠損するが，細かいキザミが確認できる。口縁部外面は２条１組の横位貝殻条痕文を施し，一部は口唇部外面のキザミ上に施文が重なる。742は口唇部に貝殻刺突文を施す。口縁部外面は貝殻腹縁による縦向きの横位貝殻刺突文を連続して施した後，斜格子状の沈線文



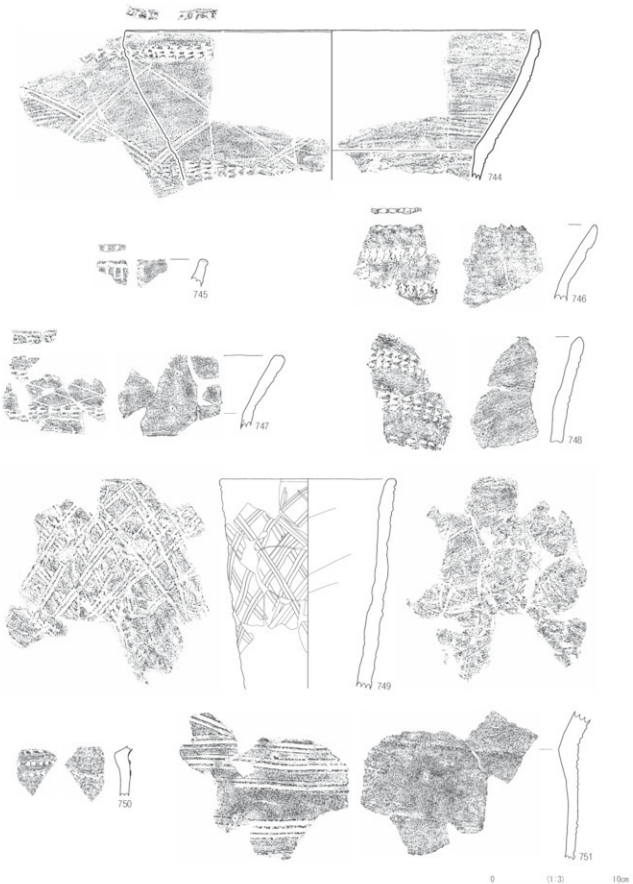
第340図　XVI類土器（２）

を施す。745の内面はていねいなナデをおこなう。口唇部は工具による刺突文を施す。口縁部外面は２条の横位の短沈線文を施し，その間隙に縦向きの沈線文を連続して施す。短沈線文の施文具は不明である。

744・746～750は口縁部から胴部である。744・746は口唇部に貝殻腹縁による三日月形の刺突文を施す。744は口径32.4cmと大型で，口唇部を舌状に整形し，口縁部はやや膨らむ。口縁部外面に縦向きの横位貝殻刺突文を連続して施し区画した後，区画内に２条１組の沈線文を斜格子状に施す。746・748は口唇部を薄手に整形し，内面はていねいなナデをおこなう。746は口縁部外面上部と屈曲部外面に，貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して施す。748は口縁部外面から胴部外面にかけ縦向きの貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して等間隔で施す。747は施文パターンは739と同様で，口縁部外面と胴部外面の境で横位に沈線文を施す。胎土に金雲母を多く含むことからも，739と同一個体と考えられる。749は丸みをもつ口唇部から胴部下位へややすすぼまる円筒形である。器面全体にナデをおこなうが，胴部は内外面とも凹凸が残り粗い。口縁部外面から胴部半ばに，やや太めの棒状工具による沈線文を斜格子状に施す。750は口縁部と胴部の境が強く屈曲する。胴部外面上位に２条の微隆線をつくり出し，その上に貝殻刺突文を施す。胎土や焼成から，741と同一個体と考えられる。751は口縁部近くから胴部で，幅狭の横位貝殻条痕文を間隔をあけ施す。胎土に金雲母を多く含む。735・736と同一個体と考えられる。752は口縁部下位と胴部の境が緩やかに屈曲する。内外面にナデをおこなうが，凹凸が残り粗い。外面の磨耗が著しいが，口縁部外面上位に縦向きの横位貝殻刺突文を施し，下位に押引き状の横位貝殻刺突文を施す。胴部外面は２条１組の工具による深い沈線文を格子状に施す。

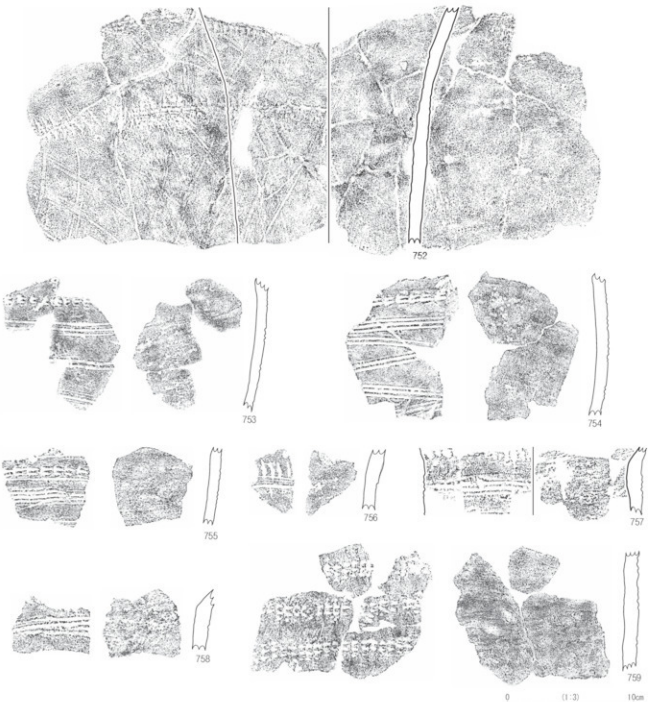


第341図　XVI類土器（３）



第342図　XVI類土器（4）

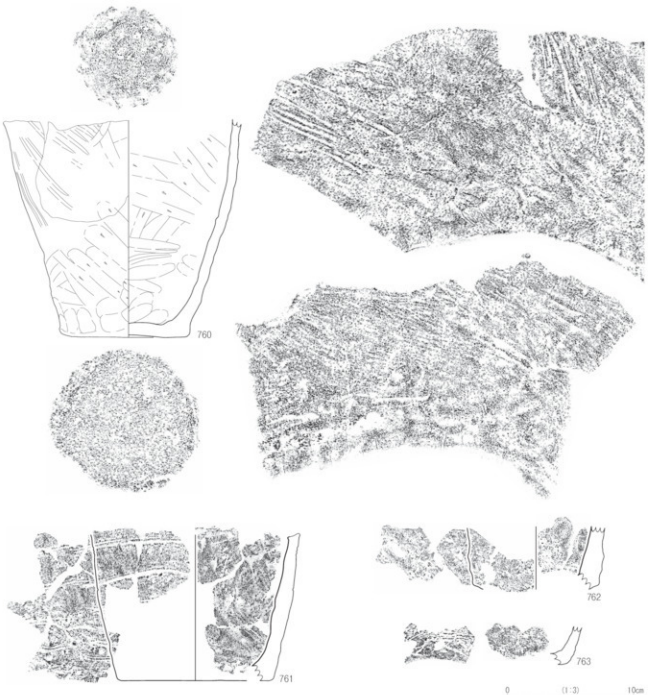
753～759・762は胴部である。753と754はやや丸く膨む。753は胴部上半が口縁部に向かい肥厚し，内面はていねいなナデをおこなう。上部は縦向きの貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して施し，その下位から下部にかけ，横位貝殻条痕文をやや間隔をあけて施す。胎土に金雲母を多く含む。754は外面上部で縦向きの貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して施し，その下位から下部にかけ横位や斜位に貝殻条痕文を施す。755は上部で2条の沈線文を間隔をあけて横位に施し，この間に縦向きで押引き状の横位貝殻刺突文を連続して施す。下部では横位貝殻条痕文を間隔をあけて施す。胎土に金雲母を多く含む。755は740と同一個体と考えられる。756は上部で工具による縦向きの横位刺突文を施した後，2条の沈線文を横位に施す。胎土に白色鉱物を多く含む。756は745と同一個体と考えられる。757は，口縁部との境の屈曲部分と考えられる。上部に貝殻腹縁による縦向きの貝殻刺突文を連続させて横位に施し，中部～下部ではやや間をあけて貝殻条痕文を横位に施す。758は口縁



第343図　XVI類土器（5）

部近くである。横位貝殻条痕文を施す。胎土に金雲母を多く含む。759は縦向きに貝殻腹縁による横位貝殻刺突文を連続して等間隔で施す。胎土に金雲母を多く含む。759は748と同一個体と考えられる。762は底部近くである。内外面をともにナデをおこなうが，整形時の指おさえが残り粗い。762は749と同一個体と考えられる。

760・761・763は胴部から底部である。内外面をナデや指おさえで調整するが，器面に凹凸が残り粗い。760は残存部分が全周しており，やや膨らみをもちつつすぼまる胴部から平坦な底部へ至る。上半分に斜位の条線が見られるが，施文か調整痕かは判断し難い。胎土にはガラス質鉱物，白色鉱物を多く含む。761は膨らみをもつ胴部である。内面には工具による調整痕をおこなう。胴部は2条1組の沈線文を横位に施す。胎土に白色鉱物を多く含む。763は底部円盤周縁上に，胴部の粘土帯を乗せ積み上げた接合痕が認められる。胴部外面に短い横位貝殻条痕文を施す。



第344図　XM類土器（6）

XⅦ類土器（第345図764～第347図801）

Ⅰ～XⅥ類の各分類に当てはまらない土器の一群である。

764～768は，石英粒を多く含み，内面にていねいなナデを施す一群である。764・766は，口縁部外面に横位条痕文，胴部外面に斜位条痕文と刺突文を施す。764は口唇部に平坦面をもつ。765はやや直行気味の口縁部である。外面に横位条痕文を施す。767・768は底部である。768の胴部外面下部に直径9㎜の貫通しない穿孔を外面から施す。

769～771は，外面に貝殻刺突文を斜位に施す。

772～780は，外面に条線文・条痕文を施す一群である。772・776は，同一個体と考えられる口縁部及び底部である。772は，口縁部外面にミガキのようなていねいなナデをおこなった後，縦位の条線を施す。776は胴部との接合痕が明瞭に残る。773～775は，口縁部である。773は外面に斜位・横位の条痕を施す。774は口縁部外面上部が，無文である。この無文下位に横位刺突文を1条施す。刺突文下位に横位条痕文を施す。775は外面に横位に4条，縦位に2条の条痕文を施す。777・778は，胴部である。777は外面に条線と刺突文を施す。778は外面に横位条痕文を施した後，斜位条痕文を重ねて施す。779は，円筒形土器のミニチュア土器の底部である。斜位条痕文を施し，胴部下部には横位条線文を施す。780は底部である。底部外面端部に施文をもたず，その上部に横位・斜位の条痕文を施し，連続する三角形状の文様を構成する。

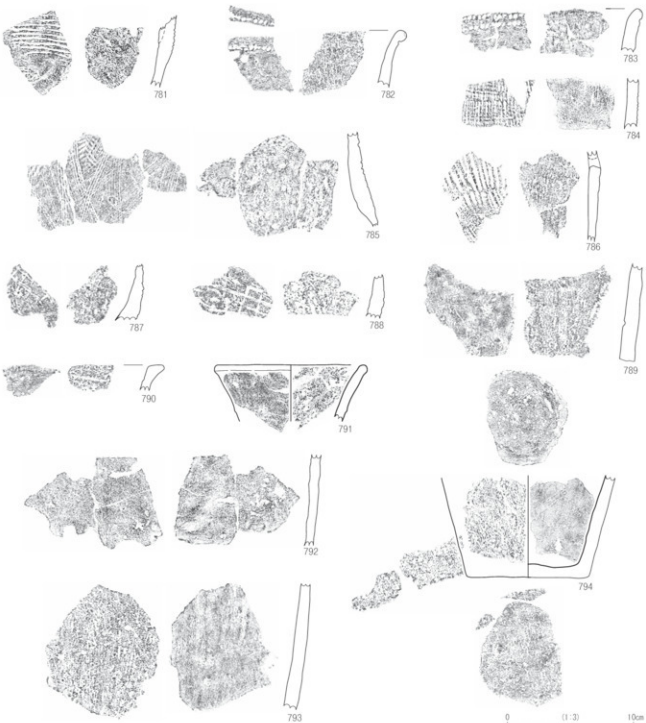
781は，胴部である。外面に縄文と思われる文様を横位に施す。782・783は，口縁部である。782は，口唇部が肥厚する。口唇部と口縁部外面上部に刺突文を施す。

第345図　XⅦ類土器（1）

784・786は胴部である。外面文様は，巻具を横方向に回転し施文すると思われる。785は胴部である。外面の一部に山形押型文を横位に施す。その上に櫛状工具による斜位条線文を重ねて施す。787・788は胴部で，同一個体と考えられる。外面は縦位と横位の条痕文を施し，格子状に見える。

789～794は，内外面ともナデをおこない，外面に文様をもたない一群である。790・791は，口縁部である。790は口縁部が肥厚し，口唇部が平坦である。内面のナデはやや雑である。789は外面に，792は内面に指おさえの痕跡が残る。793・794は，同一個体と考えられる胴部から底部である。底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面は粗いナデをおこない工具痕が残る。

795～797は，同一個体と考えられる口縁部から胴部である。口唇部に刺突文，口縁部から胴部外面に貝殻刺突文・条痕文を不規則に施す。

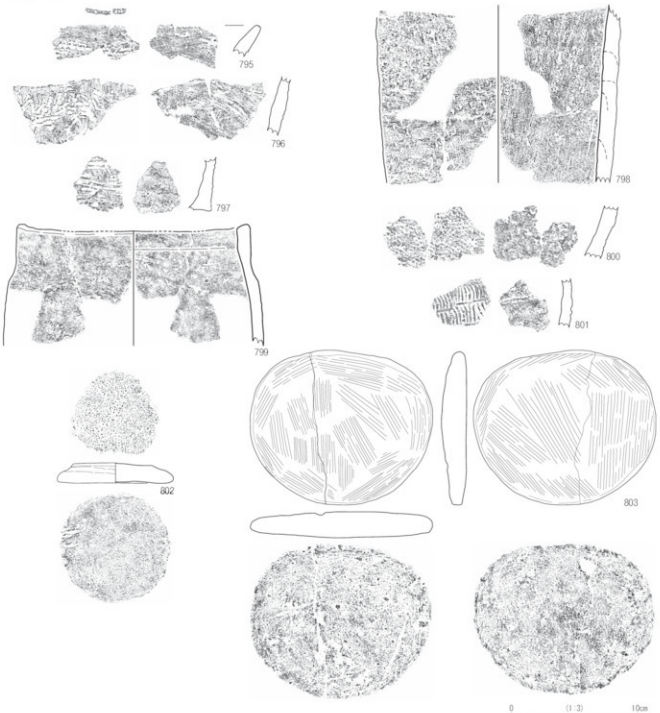


第346図　Ⅻ類土器（2）

798は，直線状に立ち上がる胴部である。外面は，粗いナデ調整しているため凹凸がある。外面上部は，不規則な条痕文を施す。799は口縁部から胴部である。胴部上部が内傾し，口縁部でやや垂直に立ちあがる。口唇部は平坦面を有し，内面は稜をもつ。口縁部外面はていねいなナデをおこなった後，枝回転による文様をもつ。800は，胴部である。外面は刺突文を施す。801は，胴部である。外面の施文方法は不明だが，魚の骨骨のような文様をもつ。

土製品（第347図802・803）

802・803は，円盤状の土製品である。802は胴部との接合部がみられ，底部片の再利用である。周辺部を打ち欠き，研磨している。803は，表裏に条痕調整があり，裏面はススが付着している。周辺部は，研磨して丸みを帯びている。断面の焼成状況から，底部片の再利用ではなく，目的をもって作られたと考えられる。



第347図　XⅢ類土器（3）・土製品

(2) 石器

石器出土状況（第349・350図）

石器は調査区全体にわたって多くの出土がみられた。器種としては石鏃，石槍，石匙，削器，掻器，異形石器などの狩猟具類と，磨石・敲石類，礫器，打製・磨製石斧，石皿，砥石などの加工具類が出土したが，特に石鏃，磨石・敲石類の出土が多い。

分布範囲としては調査区C～Fを中心に出土し，特に調査区C・Dに集中している。興味深いのは，落とし穴が点在している調査区A・Bでは石器の出土がほとんどみられない点であり，狩り場や森など居住域以外の空間であったことをうかがわせる。

石鏃（第348～360図）

縄文早期の包含層であるX～XII層から出土した打製石鏃，うち未製品，破損品を含め230点を図化した。主に形状を観察し，以下のように分類を行った。

石鏃分類

Ⅰ類　基部が平坦で抉りのない平基式無茎鏃

Ⅱ類　正三角形状を呈するもの

　a 正三角形状を呈し基部の抉りが浅いもの

　b 正三角形状を呈し基部の抉りが深いもの

Ⅲ類　二等辺三角形状を呈するもの

　a 二等辺三角形状を呈し基部の抉りが浅いもの

　b 二等辺三角形状を呈し基部の抉りが深いもの

Ⅳ類　先端部が錐状のハート形を呈し，抉りが深いもの

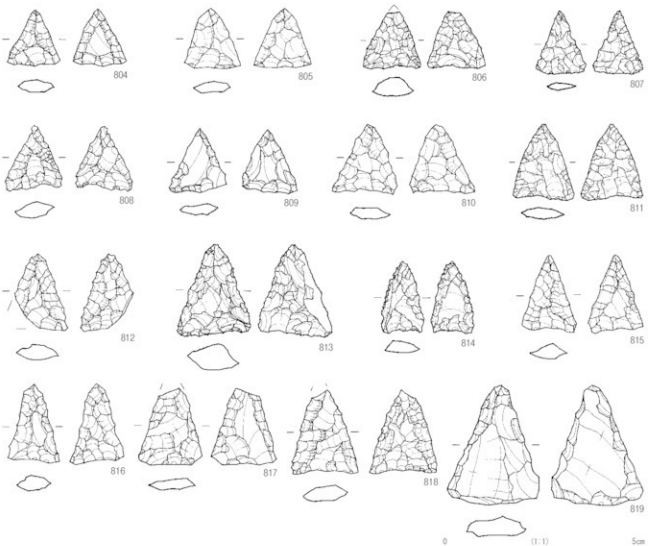
Ⅴ類　打製石鏃のうち欠損のため全体の形状が不明なもの

Ⅵ類　打製石鏃のうち未製品なもの

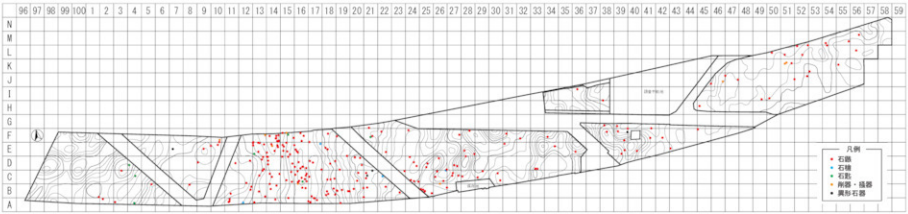
Ⅶ類　磨製石鏃

　a 磨製石鏃のうち全面磨製のもの

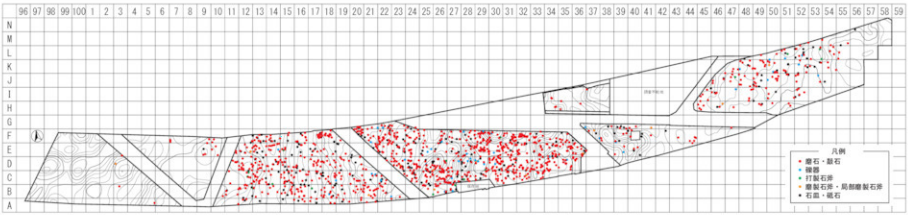
　b 磨製石鏃のうち局部磨製で側縁部に剥離を残すもの



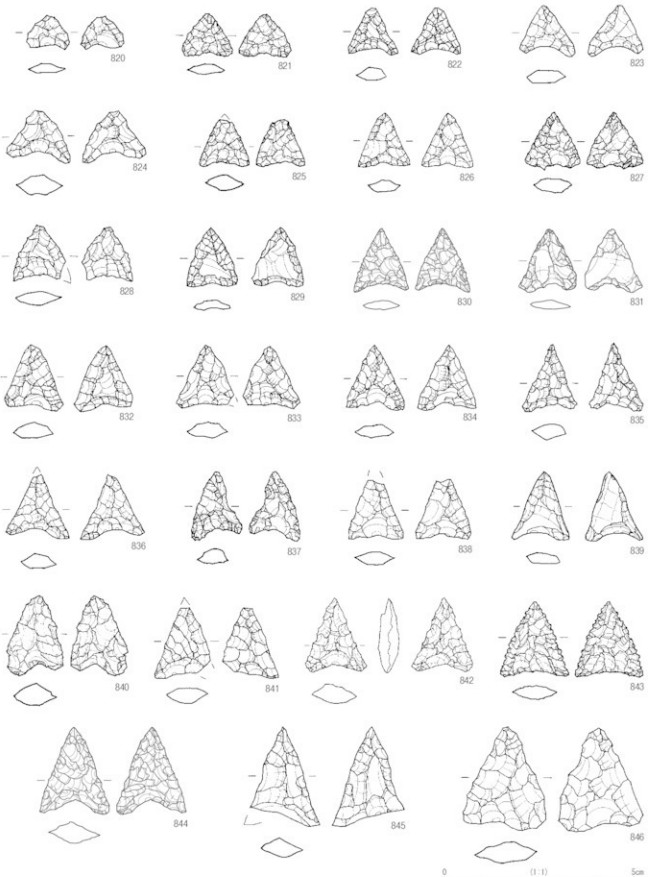
第348図　石鏃Ⅰ類



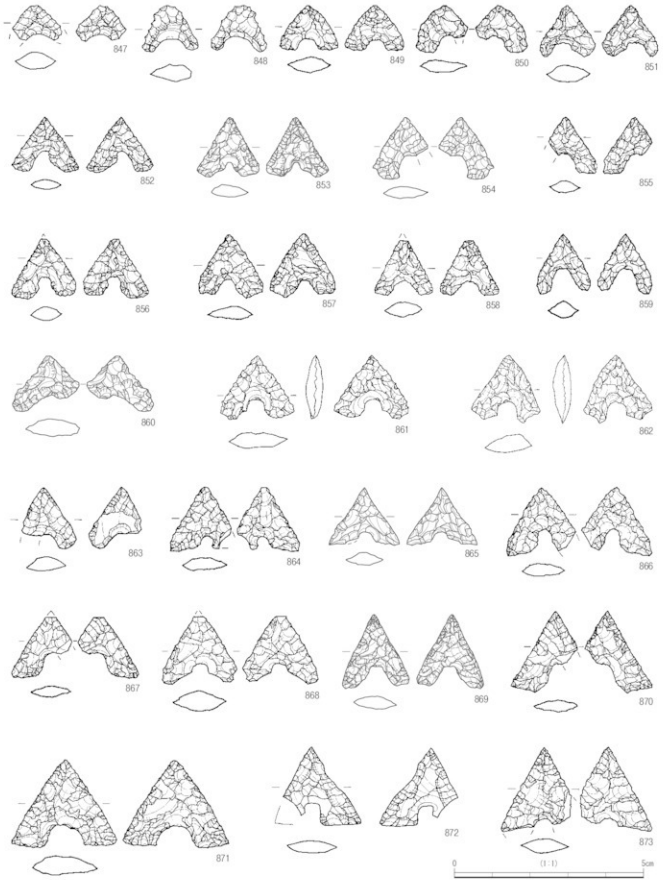
第349図　石器分布図（狩猟具類）



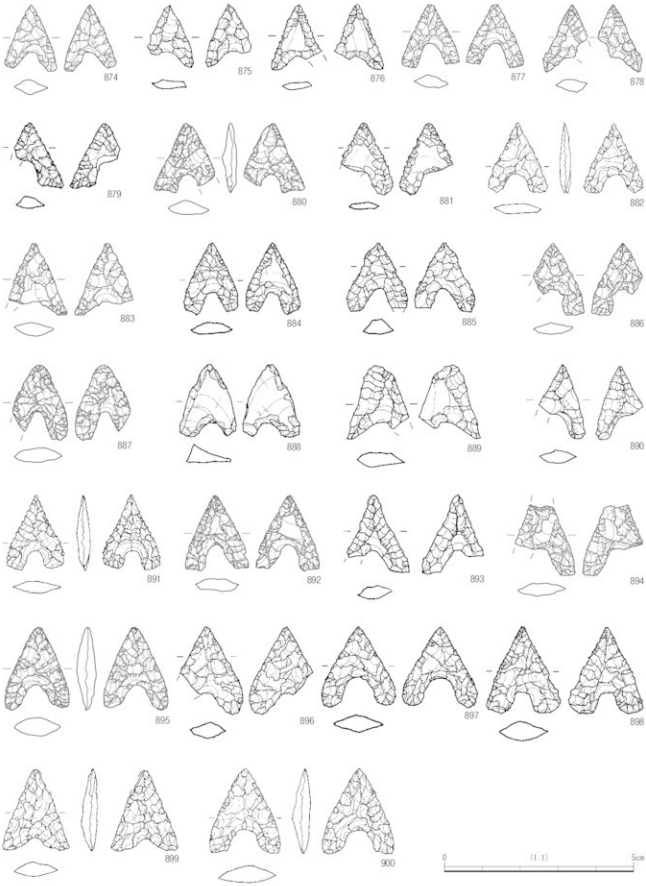
第350図　石器分布図（加工具類）


820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
0
(1:1)
5cm

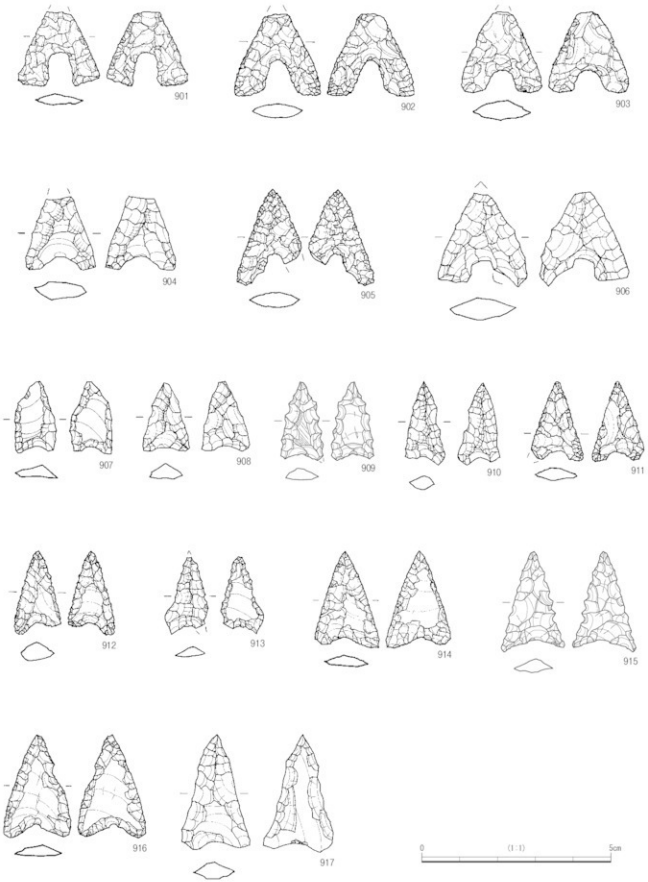
第351図　石鏃Ⅱa類



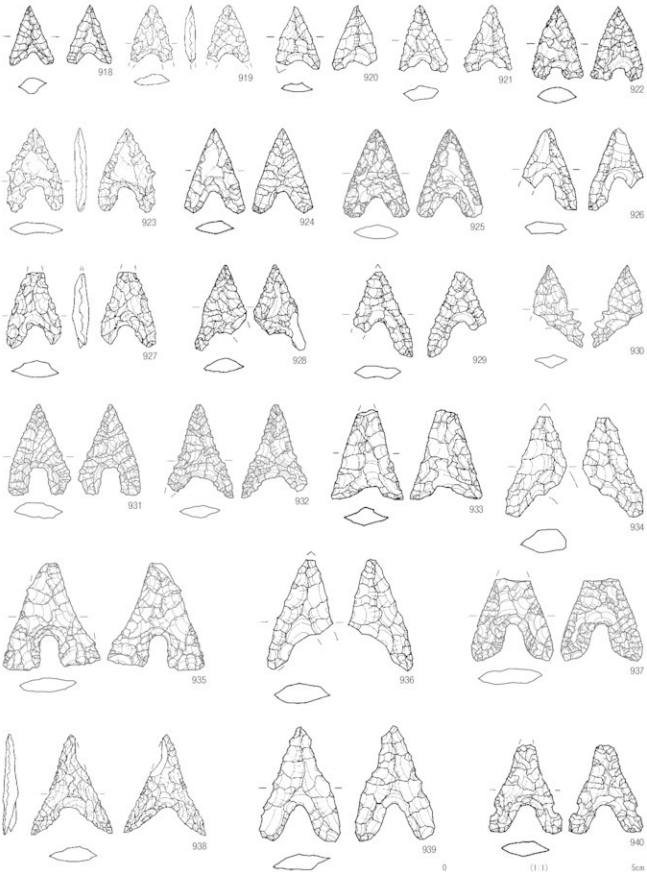
第352図　石鏃Ⅱb類（1）



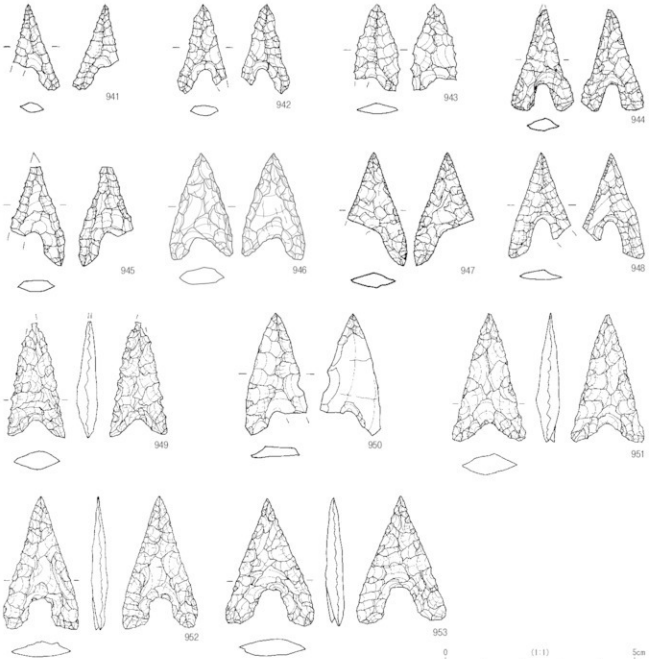
第353図　石鏃Ⅱb類（2）



第354図　石鏃Ⅱb類（3）・石鏃Ⅲa類



第355図　石鏃Ⅲb類（1）



第356図　石鏃Ⅲb類（2）

Ⅰ類（第348図804～819）

804～819は抉りのない平基式無茎鏃である。石材は安山岩が最も多く，次いで黒曜石が多い。

804～813は正三角形状を呈するものである。804～809は小型のもので全長が1.5cm程である。806は玉髄製で，他のものと比べて厚みがある。

810～812は全長が2.0cm程である。811は両側縁が外側にやや湾曲し，812は片側縁が鋸歯状をなす。813は大型で全長が2.5cm程あり，厚みがある。

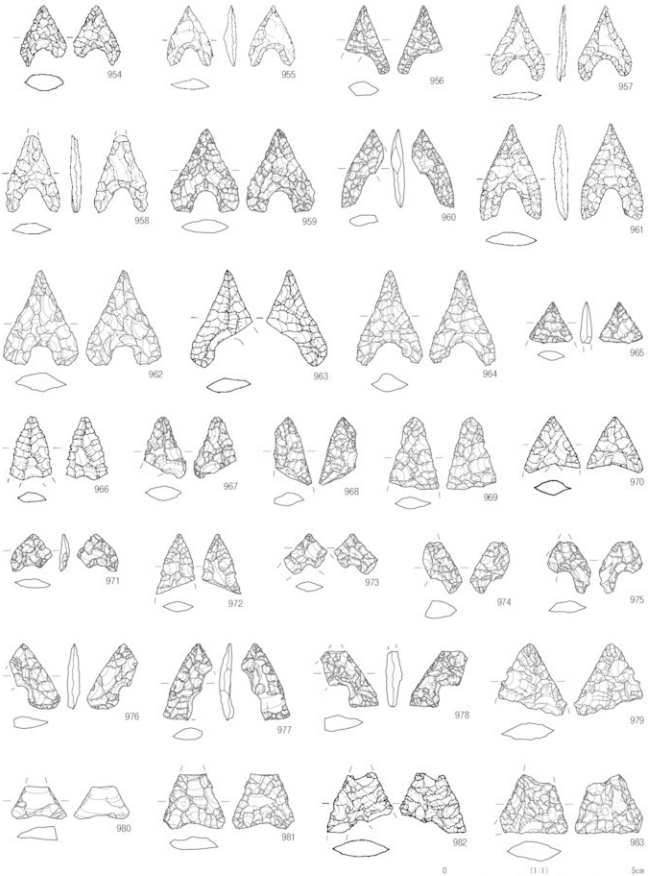
814～819は二等辺三角形状を呈するものである。全長は2.0cm程度のものが中心である。814は両側縁が外側にやや湾曲し鋸歯状を呈するもので，818は片側縁が鋸歯状をなす。819は3.0cm超の大型で，主要剥離面を残す剥片鏃である。

Ⅱa類（第351図820～846）

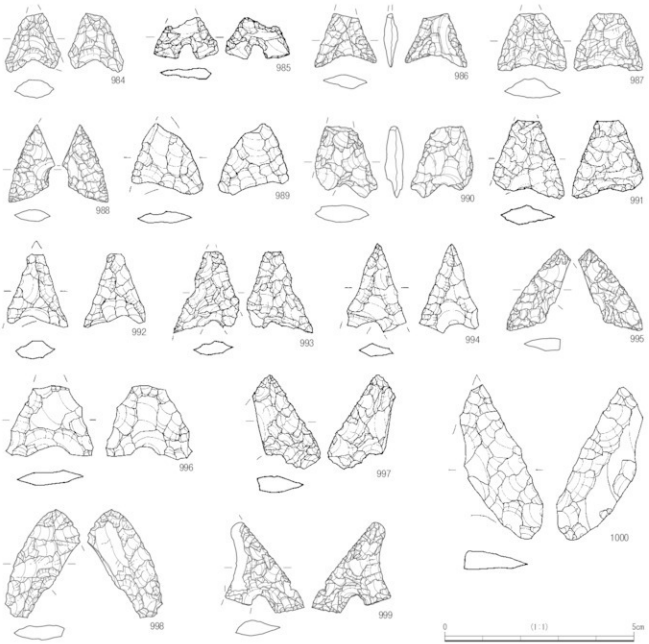
820～846は正三角形状を呈し，抉りが浅いものである。石材は黒曜石が主体で，次いで安山岩製が多い。

820～829は小型のもので全長1.0～1.5cm弱の大きさである。

823は頁岩，824はチャート，829は鉄石英製である。820～824は最大幅が全長よりも大きく，扁平である。



第357図　石鏃Ⅳ類・石鏃Ⅴ類（1）



第358図　石鏃Ⅴ類（2）

830 ～ 843は全長1.5 ～ 2.0cm程の大きさである。830・843は均整のとれた左右対称形であり，843は両側縁が鋸歯状を呈する。831・839は主要剥離面を残す剥片鏃である。837は両側縁が外側にやや湾曲している。844 ～ 846は大型のもので2.5 ～ 3.0cm程である。

Ⅱb類（第352図847 ～第354図906）

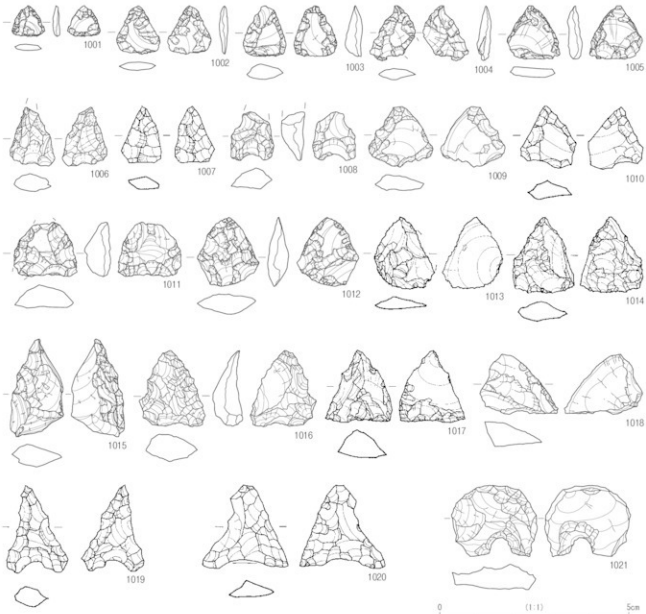
847 ～ 906は正三角形状を呈し，抉りが深いものである。石材は黒曜石とチャートでほぼ占めている。

847 ～ 851及び860・861は最大幅が全長よりも大きくやや扁平である。うち847 ～ 851は小型のもので全長が1.0cm程である。849・850は両側縁がやや外側に湾曲し，851は側縁部がややくびれるものである。

852 ～ 868は全長が1.5 ～ 2.0cm程である。864 ～ 866はいわゆる鍬形鏃に近い形状を呈する。864は両側縁がやや鋸歯状をなしており，865はややくびれるものである。

869 ～ 873は2.0cm強の大きさである。871・872は鍬形鏃で脚部の先が幅広く角張っている。874 ～ 894は全長が最大幅よりも大きく，やや二等辺三角形に近い形状を呈する。

874 ～ 892は2.0cm前後のものである。882・885・891は両側縁が鋸歯状を呈する。885は鉄石英製である。887は先端部が丸みをおびている。888は主要剥離面を



第359図　石鏃Ⅵ類

残し，ほとんど調整のみられない剥片鏃である。892は側縁部が直線状に近い。

893 ～ 900は2.5cm前後のものである。893は側縁部がややくびれるもので鋸歯状をなしている。895・897・900は側縁部が直線状に近いものである。898は厚みがある。899は抉りが比較的浅い。

901 ～ 906は比較的大型のもので3.0cm弱のものである。901・902は鍬形鏃で脚部の先が幅広く角張っている。U字状の深い抉りをもつ。903は玉髄製で全体的に丸味をおびた形状である。904は大きめの押圧剥離が施されており，抉りが比較的浅い。905は全長が最大幅よりもやや大きく二等辺三角形状に近い。丁寧な押圧剥離が施され両側縁は鋸歯状を呈する。906は先端が欠損する。

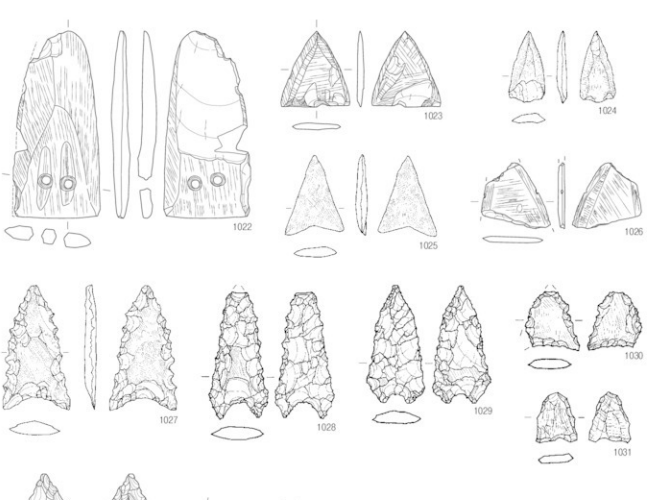
Ⅲa類（第354図907 ～ 917）

907 ～ 917は二等辺三角形状を呈し，抉りが浅いものである。断面が三角形のものが多い。石材はチャートが主である。

907・908は2.0cm未満のものである。907は表裏とも主要剥離面を大きく残す剥片鏃である。

909 ～ 913は2.0 ～ 2.5cmのものである。909はほぼ左右対称に近い形状で，両側縁がしっかりとした鋸歯状を呈する。910は片側縁が外側にやや湾曲しており，911は両側縁が直線状である。912は両側縁が細かい鋸歯状で身が厚い。913はハリ質安山岩製で一部に主要剥離面を残す。

914 ～ 917は3.0cm前後のものである。914は一部に



第360図　石鏃Ⅶa類・石鏃Ⅶb類

主要剥離面を残すものの，全体的に丁寧な押圧剥離が施されている。915は両側縁がしっかりとした鋸歯状を呈する。916は表裏とも主要剥離面を大きく残す。917は裏面にほとんど調整が施されていない。

Ⅲb類（第355図918～第356図953）

918～953は二等辺三角形状を呈し，抉りが深いものである。石材はチャートが主である。

918～921は20cm未満のものである。919・921は両側縁が鋸歯状を呈する。

922は両側縁が外側にやや湾曲しており身が厚い。923は表裏面ともに主要剥離面を残している。924・925は両側縁が直線状で，比較的丁寧な押圧剥離が施されている。926は右側縁が細かな鋸歯状を呈する。左脚部が欠損する。927は右脚部が短く先端部が欠損する。929は両側縁が鋸歯状を呈し，脚部が外側にやや湾曲する。930は脚部に鋸歯状の加工が施される。931は丁寧な押圧剥離が施され抉りが深い。932は側縁部がややくびれるもので，鋸歯状をなしている。933は抉りが比較的浅く基部が方形を呈する。934はやや大雑把な押圧剥離が施されている。935は鉞形鏃で脚部の先が幅広く角張っている。U字状の深い抉りをもつ。936は先端部と右脚部が欠損しているものの，丁寧な押圧剥離が施され全体として整った形状をしている。身が厚い。937は水晶製で先端部が欠損している。938は側縁部及び脚部内側まで全面的に細かな鋸歯状の加工が施されている。脚先端部は鋭く尖る。939は大きめの押圧剥離が施され，全体として調整が雑である。940は側縁部がややくびれるもので，両脚部の外側には抉りが施されている。

941 ～ 953は全長よりも最大幅が狭く，全体として細長な形状のものである。941 ～ 943は2.5cm未満のものである。941は左脚部が欠損しているもの，全体的に丁寧な押圧剥離が，両側縁には細かな鋸歯状の加工が施されている。943は両側縁が外側にやや湾曲するものである。大きめの押圧剥離が施され，全体として雑な作りである。

944 ～ 949は3.0cm程度のものである。944・945は側縁部がややくびれるものである。945は脚部の先が尖っている。946は両側縁が外側にやや湾曲するものである。大きめの押圧剥離が施され，裏面中央部分には主要剥離面を残す。947・948は側縁部がややくびれ，細かな鋸歯状の加工が施されるものである。脚先端部は尖っている。949は先端部が欠損しているもの，細長で身の厚いものである。両側縁は鋸歯状の加工が施されている。

950 ～ 953は3.5cm程度のものである。950は，表面は丁寧な押圧剥離による調整が施されているもの，裏面は先端部と基部部分のみ調整が施され，大部分が主要剥離面を残している。951は細長で左右対称形に近く身が厚いものである。抉りは比較的浅い。952は側縁部が中央へややくびれ，U字状の深い抉りをもつ。953はやや正三角形に近い形状で，U字状の深い抉りをもつ。

Ⅳ類（第357図954 ～ 964）

954 ～ 964は先端部が錐状のハート形を呈し，抉りが深いものである。石材はチャートが主で，次に黒曜石が多い。954・955は1.5cm程度のものである。脚先端部が尖っている。954は安山岩製で身が厚く，955は鉄石英製で裏面は主要剥離面を大きく残すものである。鏃956 ～ 960は2.0cm前後の大きさである。956は左脚部が欠損している。957 ～ 959は側縁部がややくびれ，鋸歯状の加工が施されている。957は表裏面とも中央部に主要剥離面を残す。960・961は形状が類似しており，側縁先端部付近がややくびれたあと，外側に湾曲するものである。962 ～ 964は側縁部が中央へややくびれるものである。962・963は脚部の先が角張っているもので，964は先端部が尖るものである。

Ⅴ類（第357図965 ～第358図1000）

965 ～ 1000は欠損のため全体の形状が不明なものである。本来はⅠ～Ⅳ類のいずれかに属するものが大半であると考えられる。

965～973・976・977・979・994・995・997・998は，脚部あるいは基部が欠損したものである。971・973は小型で，998は大型のものである。

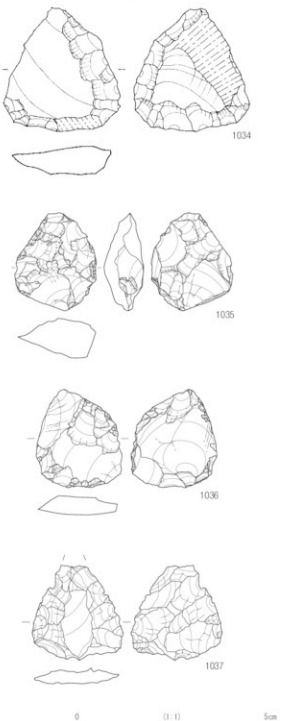
974・975・978・980～987・989～993・996・999・1000は先端部が欠損している。1000は非常に大型のものである。

Ⅵ類（第359図1001 ～ 1021）

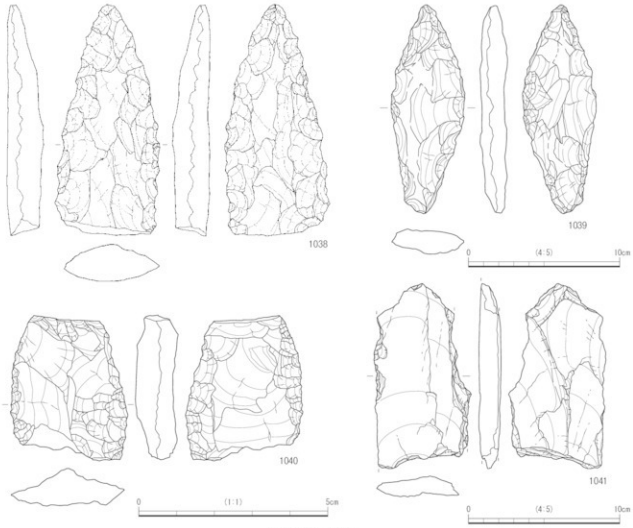
1001 ～ 1021は打製石鏃の未製品であると考えられるものである。

1001 ～ 1008は小型のものである。特に1001は非常に小さい。1001 ～ 1007・1009・1010・1014・1016・1017は三角形状を呈し，石鏃の形状が整いつつある。

1006・1016・1017は基部が浅い抉り状を呈している。



第361図　尖頭状石器



第362図　石槍

1019・1020は視覚的にも石鏃であることは明瞭で，完成品に近い。

1021は基部にU字状の抉りが入るが，全体的に蒲鉾状を呈し，先端部が形成されていない。

Ⅶa 類（第360図1022 ～ 1026）

1022 ～ 1026は磨製石鏃である。石材は頁岩が主である。

1022は全長5.0cmの大型のもので，基部近くに結束のためと思われる穿孔が2箇所認められる。穿孔周辺には有溝を伴う。裏面は大きく剥離している。1023は全長2.0cmのもので，ほぼ正三角形に近い平基式の無茎鏃である。両面とも丁寧な研磨が施されて，身が薄い。1024は磨製石鏃の先端部分と思われる。本来は細長い二等辺三角形状を呈していたと推定される。1025は玉髄製で両面とも非常に丁寧な研磨が施され，ツルツルしている。抉りは浅い。1026は磨製石鏃の欠損品である。先端部付近と推定され，両面とも丁寧な研磨が施されている。

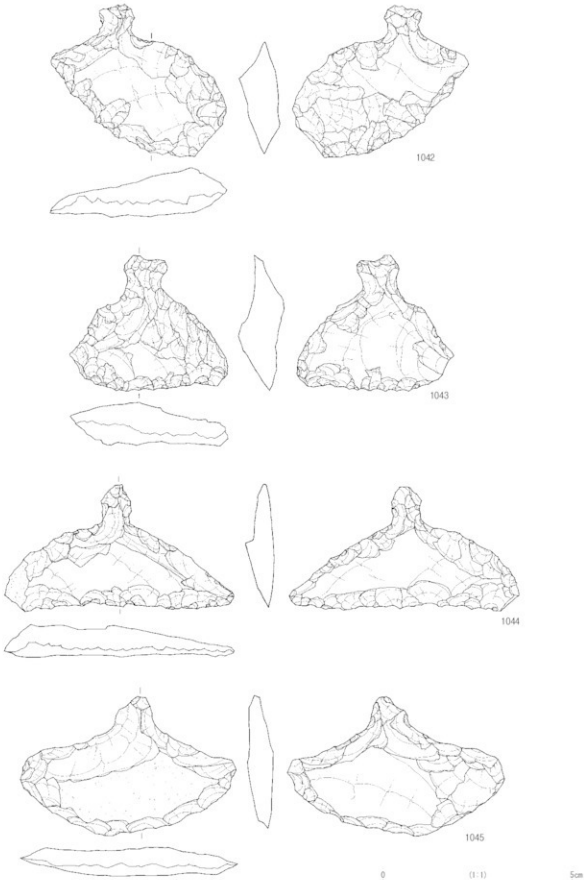
Ⅶb 類（第360図1027 ～ 1033）

1027 ～ 1032は局部磨製石鏃である。石材はホルンフェルスと頁岩が主である。無茎鏃の基部から鏃身中央部の装着部を中心として研磨され，両側縁に鋸歯状の加工が施される。

1027 ～ 1029は3.0cm前半の細長の二等辺三角形を呈するものである。1027は鉄石英製で脚部が八の字に開くもの，1028は珪質頁岩製で抉りの浅いもの，1029はホルンフェルス製で先端がやや錐状を呈する。抉りは浅く幅も狭い。1030・1031は2.0cm未満のものである。1031は押圧剥離による側縁部の調整が雑で不整形な作りである。1032は3.0cm程のもので，側縁部がやや外側に湾曲するものである。抉りは浅い。1033は欠損品で基部周辺のみが残存する。

尖頭状石器（第361図1034 ～ 1037）

1034 ～ 1037は尖頭状石器である。4点を図化した。石材は黒曜石，チャート，ホルンフェルスなどが見られた。いずれも尖頭状をなすとはいえ先端は鋭利さに欠け



第363図　石匙（1）

る。1034は三角形状の剥片を素材とし，二辺に粗めの押圧剥離を施して調整を行っている。1035は身が厚い。

1036は基部部分に押圧剥離による調整を施しているが，先端部は打ち欠きによって形成されている。1037は先端部が欠損しているが，剥片素材に全体的に押圧剥離を施している。

石槍（第362図1038～1041）

1038～1041は石槍である。4点を図化した。1038は安山岩製で，欠損品ではあるが残存部径6.0cm程を測る大型のものである。本来は柳葉形を呈すると考えられる。1039はハリ質安山岩製で全長6.0cm弱である。柳葉形を呈する。1040はチャート製の欠損品である。両側縁部を細かな押圧剥離により調整している。1041は粘板岩製の未製品である。全体のサイズや形状から石槍として扱った。

石匙（第363図1042～第364図1048）

1042～1048は石匙である。7点を図化した。石材はチャートと安山岩が多く，他に頁岩と黒曜石製が見られた。

1042～1045は横長のものである。1042は刃部がやや斜刃になるものである。1043・1044は横方向の刃部で，しっかりとした摘まみが作出されている。1045は刃部が弧状を呈するもので，全体的に粗い調整である。

1046～1048は縦長のものである。1046は刃部がやや弧状をなし，全体としてイチゴ形を呈する。しっかりとした摘まみが作出されている。1047は刃部がやや斜刃になるものである。1048は欠損品で，摘まみ部分のみが残存している。

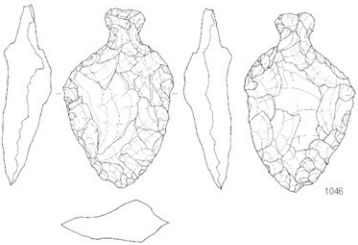
削器（第365図1049～第366図1057）

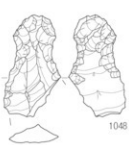
1049～1057は削器である。9点を図化した。剥片の縁辺部や端部に二次調整を行い，刃部整形が施される。石材はチャートと安山岩が主で，他に黒曜石と玉髄製のものが見られた。

1049は縦長剥片を素材とし，両側縁部に押圧剥離を施すことによって刃部加工を行っている。1050は黒曜石製の小型のものである。側縁部及び端部に刃部加工が施されている。裏面は主要剥離面のままである。1051は片側の側縁部のみを刃部形成している。刃部はやや内側への弧状をなす。1052は横長剥片を素材とし，一辺に両面からの押圧剥離を施して刃部形成している。1053は欠損しており全体の形状は不明だが，1054と同じ様な特徴を有していると判断し，削器として扱った。

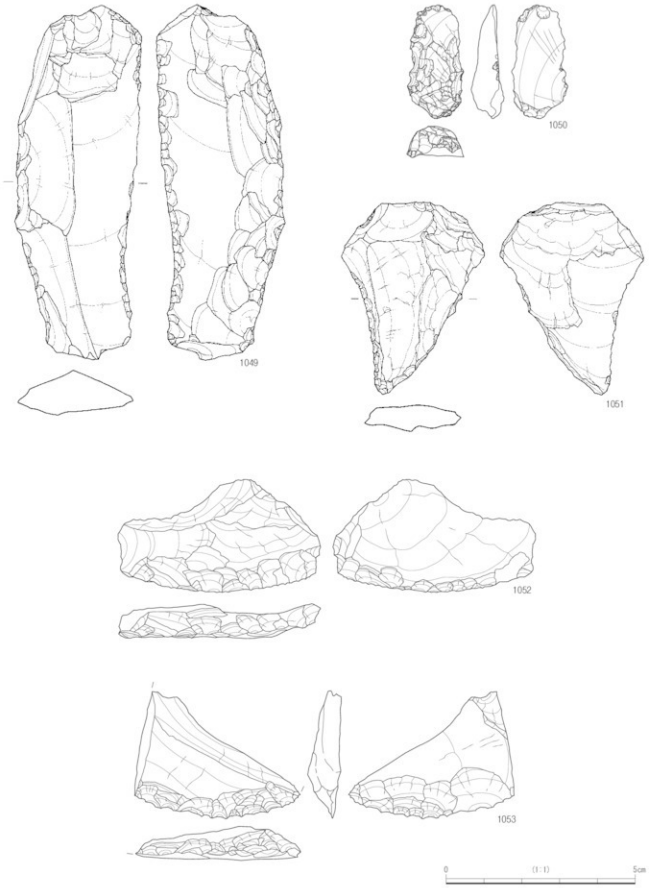
1054・1055は両面からの押圧剥離により刃部形成が行われている。1056は剥片素材の両側面に微細な押圧剥離を施し刃部を加工している。二次加工剥片に含めてもいいかもしれない。

1057は剥片素材を利用したもので，押圧剥離による刃部調整がほとんど認められない。

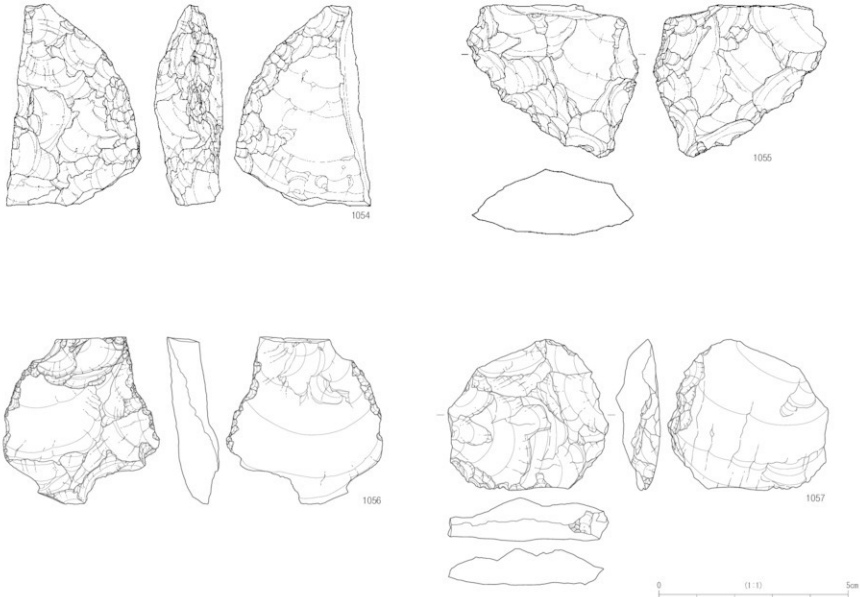




第364図　石匙（2）



第365図　削器（1）



第366図　削器（2）

第367図　掻器・石錐・ドリル・楔状石器

掻器（第367図1058）

掻器は１点を図化した。1058は黒曜石製である。縦長剥片を素材とし，一端部を片面からの粗い押圧剥離により刃部加工が施されている。

石錐（第367図1059）

石錐は１点を図化した。1059は頁岩製で剥片の一端を剥離加工により鋭角に整えている。

ドリル（第367図1060）

ドリルは１点を図化した。1060は水晶製である。六角柱状のきれいな自形結晶を利用したもので，加工はほぼ見られないが，先端部に使用痕のような剥離が認められるため，ドリルとして扱った。

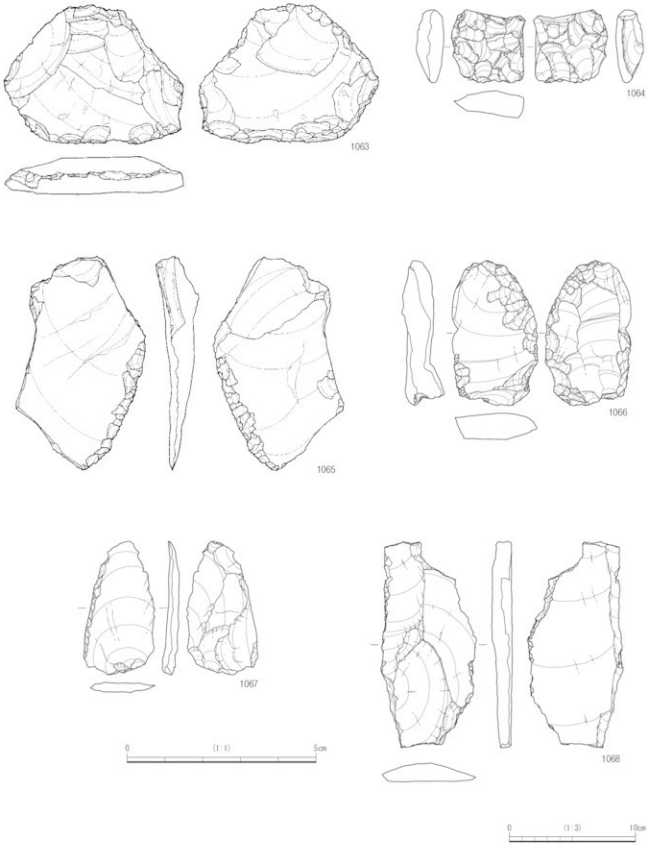
楔形石器（第367図1061・1062）

1061・1062は楔形石器である。２点を図化した。いずれも黒曜石製である。1061は三角柱状で，上下から対抗する剥離がみられ，上端部は潰れが認められる。下端部は使用によるものか刃こぼれ状に欠損している。1062は下端部を鋭角状にしている。

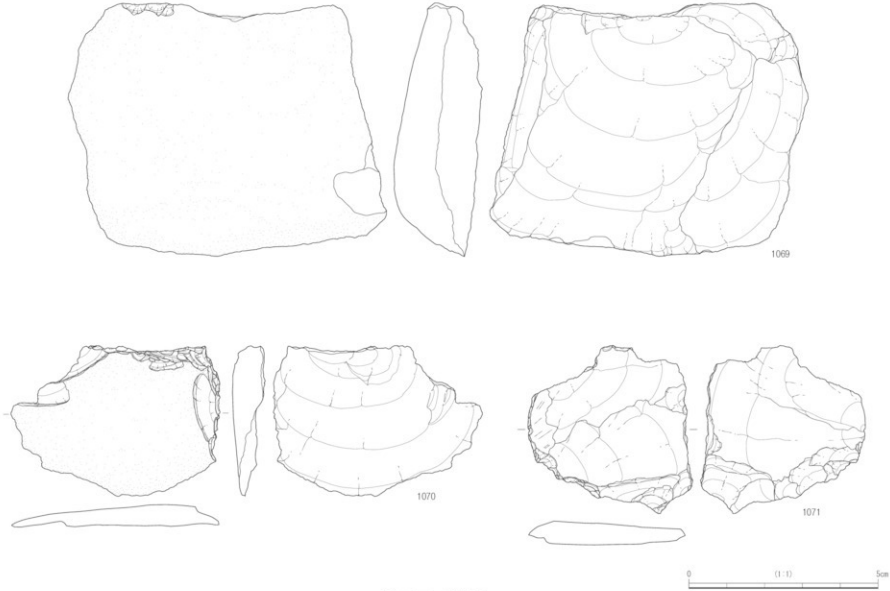
二次加工剥片（第368図1063～1068）

1063～1068は二次加工剥片である。６点を図化した。石材はチャートと安山岩が主である。剥片の縁辺部に二次調整を施すが，明瞭な刃部形成や調整が行われないものを二次加工剥片とした。

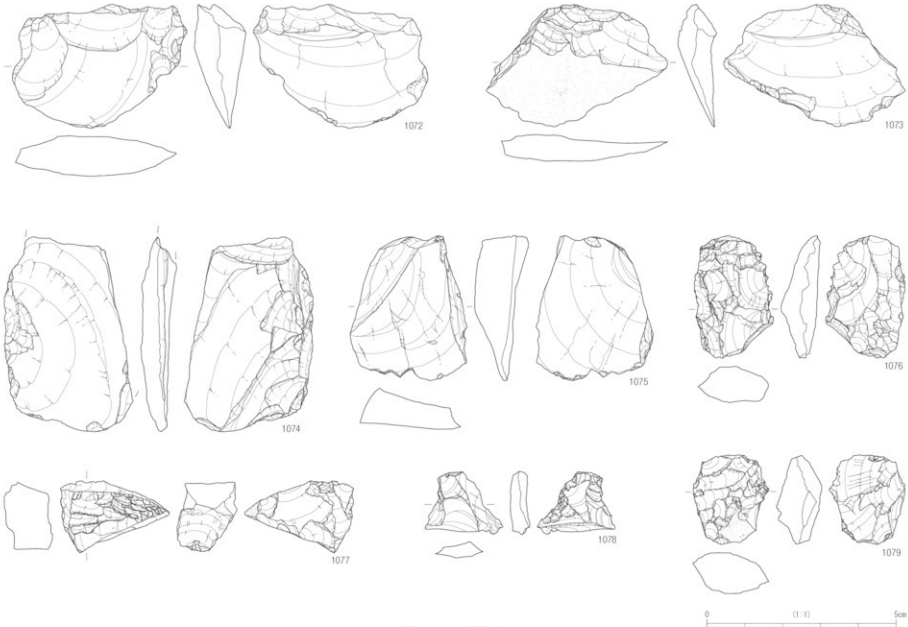
1063は頁岩製の剥片の縁辺部にわずかに剥離調整が認められるものである。1065はチャート製の剥片を素材とし，縁辺部の両面から微細な剥離加工が施されている。削器に含めてもいいかもしれない。1067もチャー



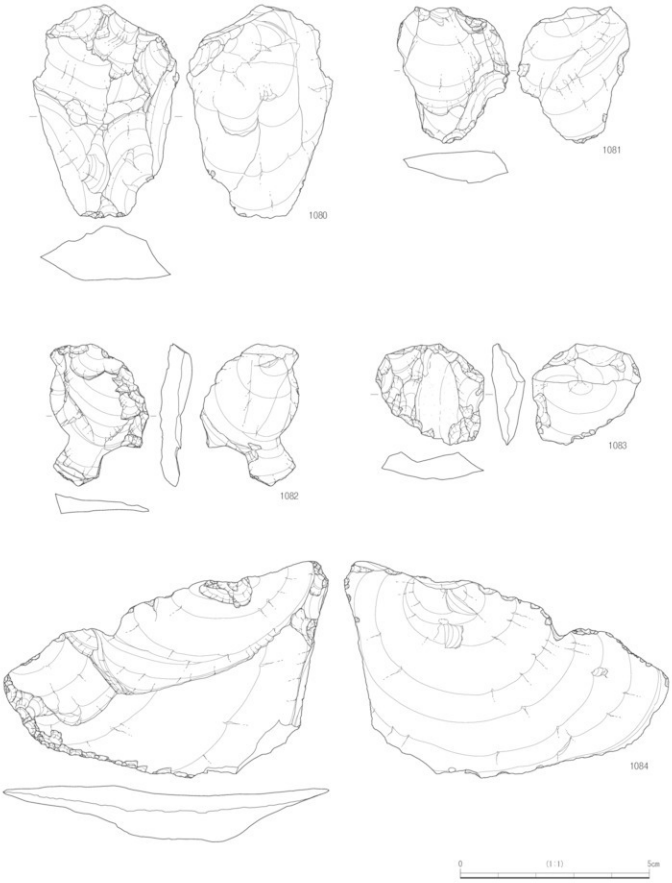
第368図　二次加工剥片



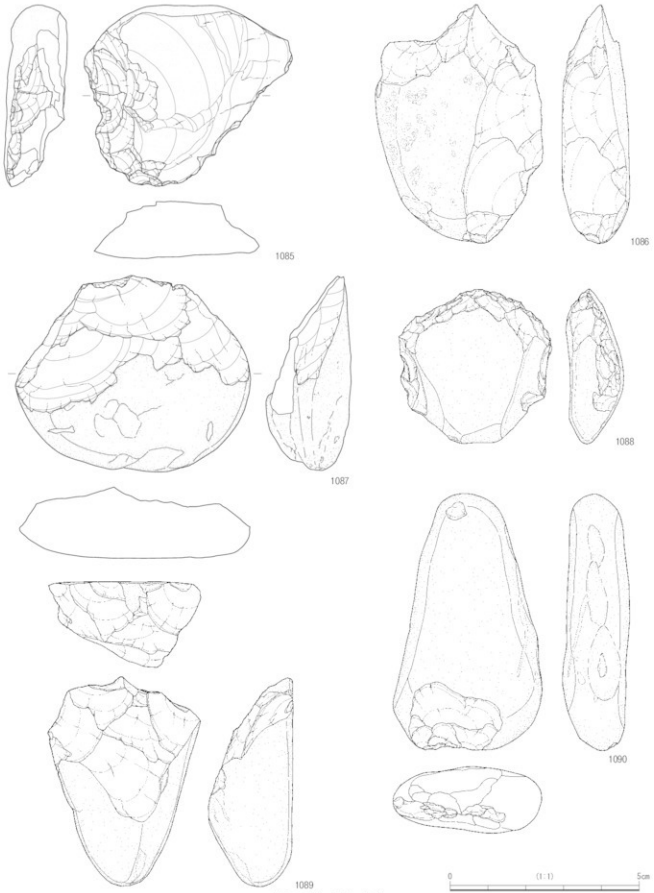
第369図　剥片（1）



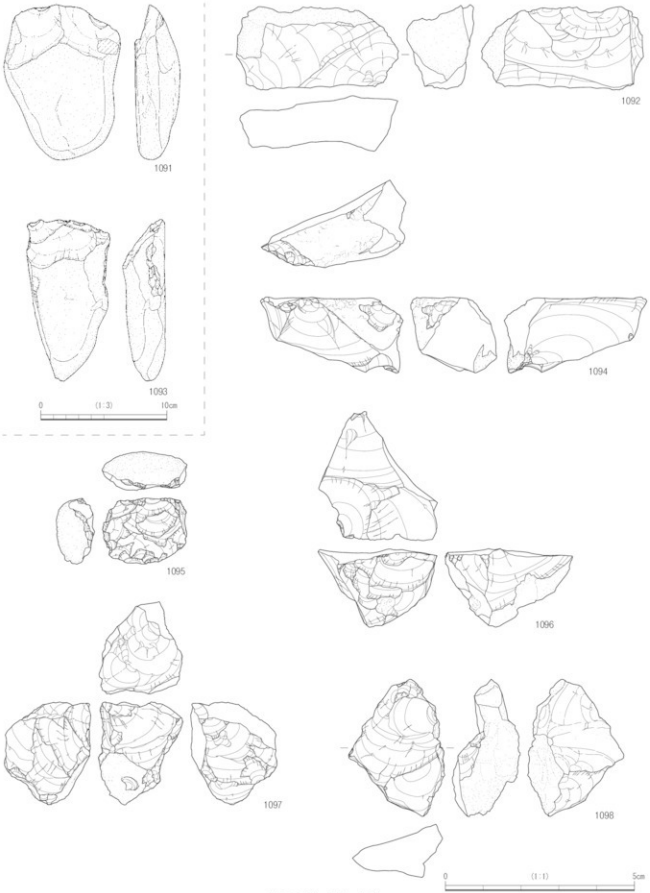
第370図　剥片（2）



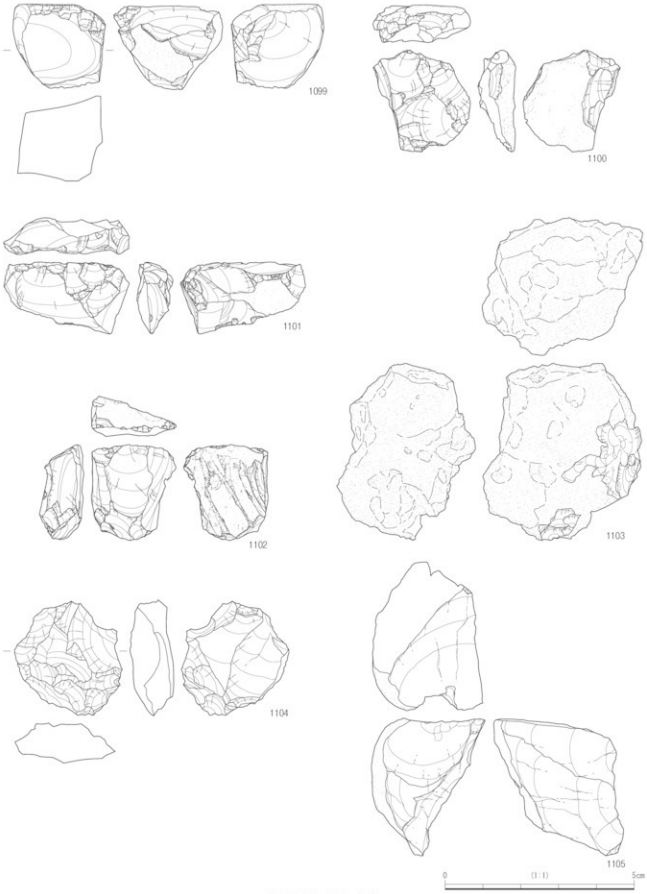
第371図　剥片（3）



第372図　石核（1）



第373図　石核（2）



第374図　石核（3）

ト製の薄い剥片を素材とし，一縁辺部に片面から微細な剥離加工が施されている。1064は黒曜石製で，全体的に押圧剥離を施しながら刃部が形成されている。縁辺部に明瞭な剥離調整は認められず，上端部が面をなしていることから，楔形石器の可能性も考えられる。1066は頁岩製である。1068は安山岩製の大型の縦長剥片の縁辺部の一部に粗い剥離調整が行われているものである。

剥片（第369図1069～第371図1084）

1069～1084は剥片である。16点を図化した。

1069は砂岩製で，打面分割して作出しており，表面には自然面を残す。

1070・1071・1073・1074はホルンフェルス製である。1070・1073は表面に自然面を残し，側縁部の一部に二次加工のような痕跡が伺える。1071・1074は両面とも同一方向からの剥離である。

1072・1075・1076・1080～1082はチャート製である。1072は側縁部の一部に微細な剥離が見られ，使用痕の可能性がある。1075は台形状の剥片である。1076は両面ともに細かく剥離されており，何らかの未製品である可能性がある。1082はつまみ状の突起部分があり，反対側の側縁部に二次加工のような痕跡が認められる。石匙の未製品である可能性がある。

1077・1078は黒曜石製の折断剥片である。いずれも２辺を折断している。1078は左右側縁部の裏面に二次加工のような痕跡が認められる。

1079は黒曜石製で，表面は頂部を中心に放射状に細かな剥離が行われており，裏面は打面転移しながら剥離が行われている。何らかの未製品である可能性もある。1083は珪質頁岩製である。側縁部の一部に二次加工のような痕跡が認められる。1084は砂岩製である。翼状の剥片で，側縁部に細かい使用痕状の剥離が認められる。使用痕剥片としてもいいかもしない。

石核（第372図1085～第374図1105）

1085～1105は石核である。21点を図化した。

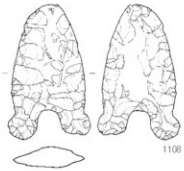
1085は玄武岩製で，扁平楕円礫に平坦な打面を形成した後，打面転移をしながら剥片を剥いでいる。

1086・1087は扁平楕円礫を打撃分割により打面形成した後，打面転移をしながら剥片を剥いでいる。1086は砂岩製，1087は花崗岩製である。

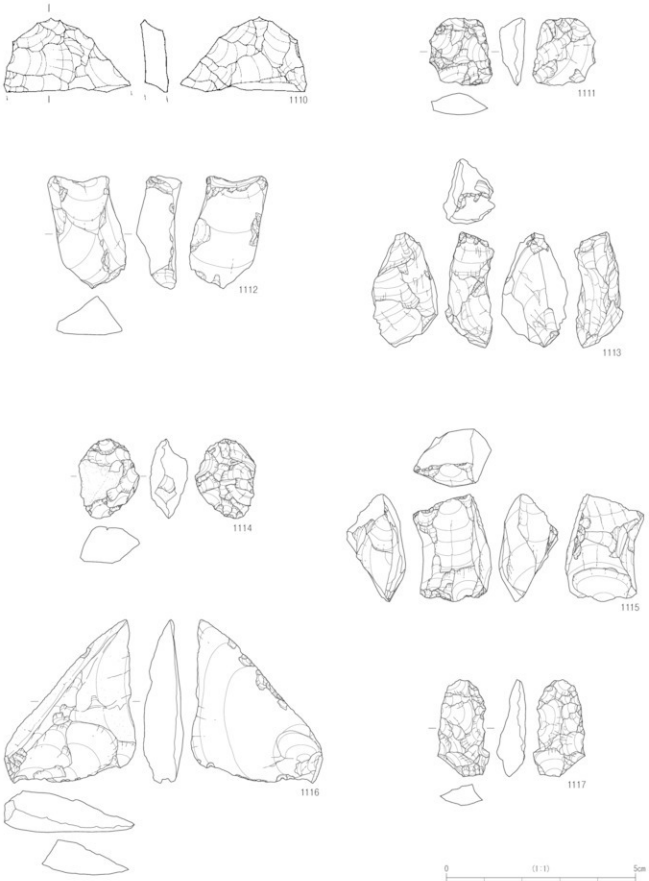
1088はホルンフェルス製で，扁平楕円礫に打面形成を行わず，縁辺部を打面転移をしながら剥片を剥いでいる。1089は砂岩製で，三角柱状の礫を素材とし，頂部から縁辺部に向かって剥片を剥いでいる。

1090・1091・1093はホルンフェルス製である。1090は三角形状の扁平礫の先端部を同一方向から剥片を剥いでいる。1091は扁平楕円礫を打撃分割により打面形成し，縁辺部のほぼ同一打面から同方向に複数枚の剥片を作出している。1093は扁平楕円礫を打撃分割により打面形成し，縁辺部へ向かって若干打面転移をしながら剥片を剥いでいる。

1092・1094～1102は黒曜石製である。1092・1094は平坦面を打面にして表裏両面に剥離面がみられる。1095は小角礫の分割面を打面にして剥片を剥いでいる。1096・1097は自然面を有せず，剥離方向にも規則性が

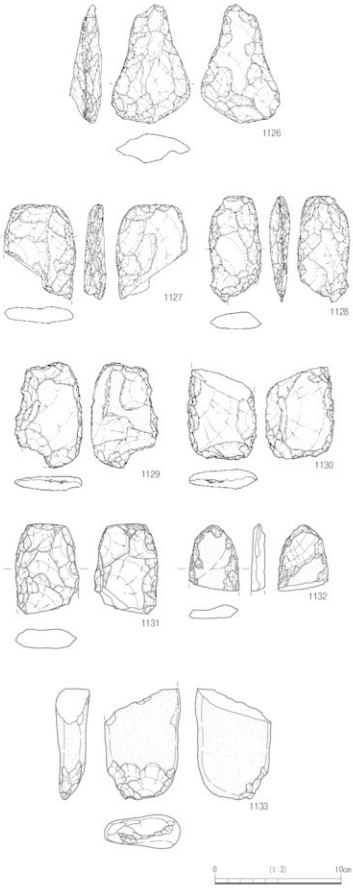


第375図　異形石器



第376図　器種不明石器

第377図　打製石斧（1）



第378図　打製石斧（2）

見いだせない。1098・1099・1100は一部に自然面を残し，剥離方向に規則性が見いだせない。1099は一部に自然面を残し，打面転移しながら剥離が行われている。1102は自然面を有し，周辺から中心に向かって剥離を行っている。1104は自然面を有せず，中心から周辺に向かって剥離を行っている。チャート製である。1103はほとんど原石の形状を残している。

1105は水晶製で，礫を打撃分割により打面形成した後，中心から周辺に向かって剥離を行っている。

異形石器（第375図1106～1109）

1106～1109は異形石器である。4点を図化した。1106は黒曜石製で，1.7cm程の小型のものである。身中央部分を中心として研磨が施される局部磨製である。先端部は丸く収まり，脚部付け根には両側縁から抉りが入る。1107はチャートの剥片を素材として剥離調整を施したもので，いわゆるトロトロ石器と呼ばれるものである。表面は全面的に剥離調整が行われているが，裏面は側縁のみの調整である。先端が欠損する。1108は先端部が丸く収まり，脚部付け根には両側縁から抉りが入る。1109は黒曜石製で琴柱状の形状を呈する。

器種不明石器（第376図1110～1117）

ここでは器種の特定できないものをまとめ，8点を図化した。

1110～1117は器種不明石器である。1110はハリ質安山岩製のもので，欠損のため全形は不明である。縁辺部を中心に押圧剥離が施されている。1112は流紋岩製で，表面は頂部を中心に放射状に剥離が行われている。裏面は主要剥離面が残る。1113は黒曜石製である。全長3.0cm程の角柱状で，楔形石器に類する。1114は2.0cm程の小型のもので，表面には自然面を残し，裏面は全面的に剥離がされている。1115は水晶製で，厚みのある角状を呈する。裏面は細長剥片を剥離した痕跡が認められる。1116は珪質頁岩製で，三角形状の剥片である。側面には自然面を残す。側縁の一部に使用痕のような痕跡が認められる。使用痕剥片に近い。1117は2.5cm程の小型のもので，両面に押圧剥離が施されている。楔形石器に類する。

打製石斧（第377図1118～第378図1133）

1118～1133は打製石斧である。石材はホルンフェルスが大部分を占める。1118は長楕円形で，ほぼ端部のみに調整を施し，刃部形成を行っている。1121は全面的に粗い剥離調整を施し，全体的